異境備忘録

特257
811

始

特

水位 宮地堅磐謹述

異境備忘録

神道天行居

はしがき

この「異境備忘錄」は今から十一年前、すなはち昭和三年十月二十三日に發行された「古神道祕說」の附錄として收載せられたのが印刷せられた初めであり、その後或る方面でそれを抄出轉載せられたものがあつたやうにも仄聞したが、とにかく此れを普通の書物の附錄として刊行したことは私共の態度にも愼重を缺く嫌ひがあつたやうにも考へられ、近年の「古神道祕說」重版の際などには此れを附載することを見合せるやうに注意して來たのである。

ところが近ごろ是非とも拜覽したいといふ眞面目な篤信の御方からの御照會があり、又た古い同志諸君からも此の「異境備忘錄」だけを少し大きな活字にした一冊ものが出來て居ると時折拜讀して信念を策勵する上にも好都合であるとの御意見があり、中川宗主も同樣の御意見なので非賣品としてさういふものを少し拵へておきたいといふ石城山本部の御希望に私も贊同することにした。

斯ういふ種類の神祇界や又は少し低い靈界の實消息を傳へた記錄は我々の團體では大正年代以來「幽冥界研究資料」としても種々のものを收めたものを公刊し

て居り、さういふものにも重要な記錄が混入して居り、又た今年一月刊行した「口語神判記實」なども固より結構なものであるけれども、この水位先生の「異境備忘錄」は學識あり冷靜な批判力ある知識人にして又た謫仙たる水位先生御自身の體驗を自ら執筆して書きとめておかれたもので、そこに格別の意義があるのみならず其の記錄の中の或る二三節の如きは全く前人未發の重大なる世界的記錄であつて、容易ならざるものであることは此れを眞面目に拜讀する人が必ず襟を正して首肯せられることであらうと信ずる。

この「異境備忘錄」の中にも餘り重要でない記事もあり、又た拜覽する人をして只だ奇異の感を催させるに過ぎぬかと思はれるものもあるにはあらうが、何度も其れらのものを彼此照合して拜讀せられるうちには、神界靈界についての相當の認識も得られ、信仰のたすけとなるべきものがあるであらうと思ふのである。

元來この「異境備忘錄」は他人に見せるつもりで書かれたものではない。まつたく水位先生の心覺えに書きとめておかれたもので、篤信な身邊の二三の人にだけは見せても可いといふ位ゐなお考へであつたのであつて、これを印刷すると云ふことについて、實は水位先生は當初あまり快よき御承諾を下さらなかつたのであるが、再三おねがひして御認諾の靈示を受けたやうな次第であつた。水位先生は暢達明快な文章を書かれる御方であるが、この記錄の中には、どうもさういふ風に思へぬ箇所もないではない。それは此の記錄の中の何處かにも自ら書いて居られるし又た他の手記せられたものの中にもあるやうに、神仙界の記錄といふやうなものは相當困難なもので、筆記せられる時には筋が立つて居るやうでも翌日讀み直してみられるとさつぱり不得要領なものになつて居たり、後日補筆しようとすると種々の故障が起つたり記憶が搔き消されたりするもので、また記錄そのものも部分的にことさらに他の或る靈氣により混線したり隱蔽されたりして居る場合があつて記錄者自身甚だしく不滿足を感ずることがあるもので、さうしたことは私も若干體驗があるが全くどうにもならぬものである。だから此の「異境備忘錄」を拜讀せられる人は其の邊の用意が必要であり、みだりに輕々しく水位先生の思想能力を評價するやうなことは愼まるべきであると思ふ。とにかく私は此の「異境備忘錄」を極めて貴重な文獻と確信して居るものである。

このたびの此の「異境備忘錄」の校訂編修等は石城山本部の御方の努力に成つたものである。

昭和十四年六月二十七日、無方齋の南窓下に於て

友清歡眞謹記

異境備忘録

水位宮地堅磐謹述

一烏の嘴と足の赤きは仙界の烏と心得べし

一兎また雉は幽界にて使はれ人間に神使となりて出る事あり

一仙界の宮殿は屋根及び柱は黒塗にて座敷は多く赤色なり

一宮殿の狀にして塔を構へて五色に彩れるは佛仙界なり

一夜寢る時天井は見えず大空の星の見ゆるは妄想にて眼を閉ぢても見ゆるものなり

一親戚の人の病死せんとする時に雪隱に入りて瞑目してハニヂの大神生死を告げ給へと唱ふる時水色にて[illegible]如此物眼前に幻に見ゆる時は其病人必ず其夜に死す

一七八歳の女月水あるまでは天狗に伴ひ行きて召使はるゝことあり又天狗界には僧侶の入りたるが最多し鷲鷹鳶の類も年經たるがありて人を脅負ひて飛行するなり

又團扇を以て飛行する時は先を團扇の柄に付きたる眼鏡にて見定め左右に打振り

向ひへ忽ち突出して僧正の先鋒をするなり此眼鏡にて大空より見る時は幾千仞の海底の物も見ゆるなり

一杉山僧正、大山僧正、火衣僧正などの飛行する時は小鷹、大鷹、飛行の三印を結びて後團扇を以て先を指し飛行するなり

一清淨利仙君、川丹先生、部令君、廣原大靈壽眞人、氷川上靈壽眞童等の肉轉人は幽界にて神仙界より人界へ事を告げ或は人閒より得道する者を神界へ取次する役目なり

一圓頭にて赤衣を着け長さ四尺許りの折烏帽子を冠とし青袴にて黑の覆輪を取りて白足袋をはき黑塗の木履を穿ち太刀を佩きたるは大山僧正なり

一頭は白髮にして赤衣を着し袴は大口に似て白色なるをはき左右に二人烏帽子を着し青衣を着け白袴をはき黃なる足袋をはき麻串を持ち其傍に古鷲の脊に山形の金色のつきて脊の左右に立上りたる色ありて坐せるは杉山僧正と其從者なり

一少彦那大神は變化無比の神にして伊邪那岐尊の代理として大司命左定官にして常には御髮は垂れて腰に至り十二三歲許りの御容貌にて脊に太刀を佩き團扇を持ち青色の衣を着け給ひ御腰の左右に幅六寸許り長さ五尺許りの平緒の黑白を六筋づつ左右に着け給ふ又神界にて司命の簿籙を毎年十月九日より改定し給ふ時は御頭に金色なる籥に似たるものを二つ合せたるが如き冠を召し其中より孔雀の尾三尾を出したまへり左の御手に長さ三尺許りの丸き木に白玉三十二貫きたる緒の總の付きたるを持ちたまひて靈鏡臺に向ひて坐したまへり

一大綿津見神の中にて海境の大英傑と稱し奉りて御姉を龍飛樣御弟を龍德樣と申して御二柱神共に海宮にて勝れ給へる御方にて龍飛樣は御歲の頃十六七許りの御容貌にて實に御面貌の美しき事比類なし御髮は長さ七尺許りにして其御髮を風切の冠と云ふに卷付け給ふ釧は孔雀三十六尾の天眞器を差し給ふ魚鱗のつきたる青衣を着し給ひ御腰に三十六の紫白の交りたる鱗形の長き緒を垂れ給ひ龍頭の劒を佩き給ひ龍德樣は御歲ごろは十五歲許りにして面は白きこと雪の如し御髮は黑くまして長さ一尺ばかりなるが立上りたり御額に金色の鉢卷をなし後にて結び其緒の端は長く坐上に垂れたり御衣は黑白交りの鱗形を着し給ひ御腰の左右に佩玉三連づゝ付け給ひ龍頭形の劒を佩き給ふ此二神は少彦那大神の輔佐をなし給ふ御神にまして人に神憑し給ひて諸の事を敎へ給ふ御神にますなり此二神の御愛慈を受くるときは御染筆を給はるは更にて海境へも入ることを得るなり

一病氣のときに先祖代々の中の靈の眼前に見はれて泣く狀の見ゆる時は病氣は平癒せずして必ず死す我體の平臥せる狀の見ゆる時は其身死したるなり

一神境にて人間界の鹽と紙とを用ゆ其餘のものは用ゆることなし

一佛境は其入口大なり川ありて舟三艘岸に着きゐたり其舟にのりて其川を渡る時は大なる黑木の門あり右の方は冥宮の館あり左の方は松樹生ひたり黑木の門を內に入れば大なる沙漠なりこゝを過ぐれば大海あり其色茶色なり其中に上の大なる山あり躑躅の花三段に咲き實に美麗なり是れ遙かに見る所にして此沙漠の岸には舟ありといへども其界の許しなければ容易く近づき見ること能はず然るにこの山にはアラヽウツタラの二佛仙釋迦氏の宮ありといふ

一神仙界の刑法所は三ケ所あり一所は北に向ひ菅原道眞公、武內宿禰の二靈此所を常に掌り給ふ菅公は左冥司大之中津大兄官にまして武內宿禰は右刑司中津大兄官なり一所は南に向ひ右の一所と川を隔てゝ向會ひたり此所は大國主神及び少彥那神の代命事代主神掌り給へり一所は大なる杉林の中にあり此所は神靈等の大罪によりては靈魂をも消滅する刑場なり武甕槌神の掌り給ふ所にして神界の兵器などあまた飾り立て其嚴重なる事言語の及ぶ處にあらず此所の殿は黑塗にして皆神等も黑衣を着し給ひていといかめしさて此所は日光の及ばざる所にして蔭地なり如何なる譯にや裏門を消却門といひて支那國の顏眞卿其門番に坐せり

一本は日本の產にて支那の仙界にある者は役小角、橘廣繼、常陸坊海尊、聖德太子、大津皇子、菊丘文坡なり然るに役小角と聖德太子とは其本は佛仙界にありしを仙界に遷りたりといへり

一大空を飛行するには三道あり第一上道を飛行するは皆尊き神等にて只金の如く光りて其狀は見えず第二中道は神使道といひて諸の幽界の使者の通行する所なり第三下道は天狗界の通行する所にて諸國の大社の上をばよけて行くなり右之三道は空中の氣によりて別あり

一日本國の深山にて御舞臺と唱ふる所五ケ所あり各御舞臺と唱ふるは方一丈の岩なり毎年六月十五日茯苓、松脂、生蜜及び人間界の糧煎を交へて靑竹に入れて御舞臺の岩下中央に埋め置きて十二月大雪の時に俄に幽界に入りたる人等其所に集りて八丈笛を六七人もして吹き歌を謠ひ天女其御舞臺にて二人舞ふなり舞終りて彼の埋め置きたるものを取出して分配して各々別るゝなり其埋めたるものゝ色は鼈甲に似たり

一幽界は八通りに別れたれども又其八通りより數百の界に別れたり然れども宇内の幽府は第一に神集岳第二に萬靈神岳なり數百の界の中に奇なる界あり其界は婦人多くして男少し婦人の衣服は美しき獸の皮と孔雀及び美麗なる鳥の羽を交へて作るなり其美しきこと舌頭の及ぶ所にあらず面貌も皆極めて美なり玉門の形は椰子を見たるが如き物出て時々其口を開きて火氣を放つされど物を燒くことなし食物をも其玉門に入れて炊ぐなり時ありて出せば煮えたり其物をもて食するなり男は皆先祖の靈を祭るを以て家格とす衣類は大蛇の皮及び獸の毛皮を以て作りたり男莖はいかなる形なるか愧ぢてあらはさず此界は地球中の人の如く生死あり上古より氣道絶えて日本の明治五年までは通行絶えたるを大幽府の改革によりて氣線を通じて幽界に入りたる人は往來せり其界の事は今より後に幽界へ出入する人より詳かなる事も必ず聞え來るべし

一杉山僧正を天狗と余が呼びし時に僧正が我は天狗の主領にして天狗にはあまた通りあれども我界にては鷲鳶の年經たるを天狗とよびて人間界より來れるは皆山人とのみ呼ぶなり我嘉永年間までは杉山僧正と呼びしが故ありて杉山清定と改めたりといへり

一日本國にて眞の天狗界にて下賤の天狗を掌領したるは二百十天狗なり是は皆名高き天狗にて過半は肉體は消滅して靈魂のみなるが多し其中には神界の川丹先生清淨利仙君等に賴みて大玄陽生延氣定期下符を司命官より授かりて五百六百千歳と年齡を定めたる符を肉體に掛けて高山深穴の中に體を止め置きて靈魂のみになりて世を渡り行く隨に其定期の至りて其體に靈魂の入る時は三十七日の閒に其體は消散して蟬の脫けたるが如くにして靈妙なる體を具足するなり又定期下符を祭りて我定命と考へ心に浮び出たる年數を書き下符と共に封じて祭るもあれど其期至らば身體は死して靈魂のみ殘りたるが最も多し靈魂のみは日々の行ひも少けれど肉體にて新參者は棒太刀石打投矢などゝ稽古を致さしむるなり此太刀は桃木にて作り表裏に彼界の文字を神代文字と唐土の文字を交へて彫付けたり

一天狗界にて惡魔を拂ふには桃木の劒の中空にして孔雀の頭の毛の入りたる刀なり又佛仙界にて惡魔を拂ふには雞冠石と雄黃を梅の肉にて煎じつめたるものを丸子となして擲ち掛くるなり神仙界にては桃核を割りて中に狼の齒を粉にしたるを入れて用ゆ

一神仙界又天狗界ともに玄胎とて肉體の異なる體に轉じたるは劒玉鏡下等幣に我が

生靈を止めて年に六度は叮嚀に祭るなり其祭祀の法は寒暖によりて異なり

一天狗などに抓まれたる人を還さんとするには風神志那津彦神、志那津姫神並に風神御使早馳神の荒御魂を祭り祈る時は其人乍ちかへるなりまた言傳(コトツタ)神と申しても よろし

一神仙界に始めて入りたる時は尊き神等の御側近く參りて御慈愛を蒙る事もあれど度々參出る事の重なる毎に其御界の掟など漸々に知るが隨に遠ざかり後には御側近く參る事も尊き御位に恐れ且つ其御掟によりて近くは參る事かなはざるなり此界にては人間の位は役にたゝざるなり御側近く參る程は天地開闢よりして後の繪卷諸の眞形圖八散結界八定祕中靈文八散後運八會上下飛文を始めて古今神階列圖など題したる物を拜見する事も得るなり然るを我が神仙の位階定まりて容易く拜見し難きは更にて其題名をだに拜聞する事かなはざるなり始めて神仙に伴はれ參る時は其御界の掟をば少しも知らぬものにしあれば必ず奇妙の靈物を拜見する事多し又位階定まりて後は上古より今日に至るまでのこと又天地間にあらゆる物及びその理をも明かに極むる事は更にて自由自在なる事も其御界にある中は儘なれども人間界にかへりては一ツも自由ならず其御界にありし程の奇妙なる事は忘れ果てゝ人間に洩して問なき條のみゆめの如くに覺えたるものなり

一萬靈神岳の神仙等には日本支那諸國の人靈の役員の數多ある中に日本產の人にては日本武尊、萬里小路藤房、楠正成、和氣清麿、豐臣秀吉、此五名神は右察官中にて勝れたる御役に坐して佛仙界と沸騰を生じたる時に神兵を繰出し給ふ時の御役目にて度々戰爭のある毎には軍大將として川丹先生に令を下し給ふ事多し其命令の出づる大元は神武天皇の坐す左察判鑑よりして退妖官に告げて發するなり此外日本產の人靈あまたありて其數幾千といふ事を知らず右の五神には各々位階あるなり此役員中にて支那人にては諸葛孔明右察官中の元點密といふ役に坐せりこれは最もよき官なり

一萬靈神岳記錄官には支那日本の學者等五千八百神坐せり其從官七十二萬二千十三名彥那神に坐せり

なるよしなり此界の主領官は少名彥那神に坐せり

一墓所は其死者の魄靈の常に住む所にして魂の幽靈となりて出現する時は必ず其墓にて魄靈と合ひて人影を作るなり墓所を畑として人糞など不淨物の穢を掛くる時は魄靈の魂に合する事難し如何に恨ありとも其念を達する事あたはず其不淨物を除き去りては人影を調へることあれば憤を達するなり又靈魂の魄靈に合して久し

く墓所へ歸らざればつひに其所に歸る事能はざるものにて別に祠を設けて鎭祀せずんば浮遊の靈となりて幽中に迷ふものなり

一幽靈の火となりて見はるゝ時は近寄り見るに瞑目して窺ふ時は其火人面の如く目口を備へたり火にて見はるゝは多くは魂のみにて其望事ある時は其言語は聲に見はれずといへども其言語の自然と我胸中に知れるものなり

一現界にて刑に罹り首を刎ねられたるは幽中の掟によりて幽靈となりて見はれ出る時は現世にて首を刎ねられたる首無の形にてあらはれ出るものなり着したるものとても亦同じ

一人は死に臨む時が一大事にて其時の心の置方によりて死後に靈魂の鋭と鈍との差別及び行先の尊卑もあるなり

一人死して靈魂となれば變形自在にして禽獸蟲魚の形をも思ふがまに〳〵なれるものなり

一神仙に伴はれて行くときは其志し行く所の界に至りて漸く其界に來れる事を知りて此地を離るゝと其界に至れるとの中間は知れざるものなり是は神府の御掟にて脫魂して伴はれゆく時は其中途は知らざるものなり又肉體にても天狗などに伴はれて始めて飛行する時も其中途は多く知らざるものにて目を閉ぢさせて後大なる鷲の年經たるに脊負はして飛行するなり久しく此の天狗界に入りたる人は鷲などには乘らず先鉾して團扇を以て行く僧正の德によりて自然に後に引かされて行くなり又神仙などに伴はれ靈魂の脫して行くことの數度重なりて後は幽界通行判鑑證を給はりて後は肉體のまゝにて參る時ありされど我儘にて何時にても參る事はかなはざるなり參る時は其月日を定めて伴ひ行く神等或は神使の參られて其時に伴はれ行くなり其時は二樣にて一ッは近き山へ伴ひ給ひて其山を步み行く隨に漸々に草木も異なる狀に見え又人家も此世とは其作狀大に違ひ道端の草花も時ならぬものも見つゝ行くに任せて何時ともなく神界に至れるなり又歸る時も自然と本登りし山に出で來るなり一ッは屋根に登りて神等の上天祕文とて十二字の語を唱へ終りて〇〇と呼び手を結び人指ゆびを立て其指の閒より息を三度空に向ひて吹く其時左足を擧ぐれば綿を踏むがごとくおぼゆる隨に神等の神威につれて自然と體の空に上る如くおぼえ山は靑黃色にして海は月の如く光り漸々に登りて見れば北の方の大空より蛛の糸に似たるものあまた人家に下りたり又登りて見れば地は丸くして月の如く光り又別に月の見えて何れを眞の月とも定めがたし又登るほ

どに下に見し地球を上に見る様になりて其れよりは又下る心地する程に神界の中の海岸と思ふ所に着くなり但し此界に至る間は絶氣の所と生氣の所と幾重にも重なりたり

一佛仙界を見たく思ふ時は神仙等に願ふ時は眼前に其界の狀を現じ又古の合戰の有様なども現じて見せ給ふなりまた眞に佛仙界に伴ひ給ひてそのさまを見せ給ふ事もあり又少名彦那大神龍飛命龍德命川丹先生清淨利仙君等に伴はれたる時は何所の界にても行きて見ることも自在なり

一神仙界と佛界とは大に差別あれども神仙界へ　へるもありて常には中惡しきことの無きを神仙界を脱して佛界に入り佛界を脱して神仙界に入るものある時且つ現界の人死して十一月八日頃に神仙界に各々の靈魂上昇せんとする時佛仙界の者前に廻りて佛仙界を神仙界と僞り見せて誘ひこみて其靈魂に先祖代々の靈魂も此界に止まり居るとて其死亡せる親戚の者の形を幻に作り見せ且つ其朋友の死したる形を見せて無理に其佛仙界の大門に引込みて忽ち其門を閉ぢて再び出る事の難き様になして其後に女は右手男は左手の掌に赤き印を押す其時に　に此界を僞りて其印證を受けずして遁れ出で眞の神仙界に入りて其由を退妖官に告ぐる時は神

仙界より神兵を繰出して征伐せらるゝなりされど戰酣になりては靈魂を互に消滅せらるゝものなり大抵三夜位の戰にて大川を隔て一方は山上より奇なる兵器を以て戰ふなり竟に兩方より尊神出て仲裁となりて其戰爭も中途にして止まるなり日本國明治四年十月には過半佛仙界を征伐して大功業ありしと聞く然るに明治十九年頃より十一月八日に神界に出る靈は集り合併して一つの火燐となりて參るなりされど年々はなし多くは地中の幽冥界と墓所などに止まり或は放火山に退けらるるもあるなり

一佛仙界の冥官九仙の中に羅喇大王といへるは此界の大豪傑と稱して髮逆立ち鬚毛面を掩ふ其毛三方に角の如く分れ其長さ二尺餘りに見え右手に常に大劍を握りて衣は龍形の大紋あるを服し眉閒に眼鏡に似たるものを以て竪の　作りたり其光りに多くの新參の靈は平伏恐怖するなり其面貌畏くも武甕槌神に似たり其體は武甕槌神より少しく大なり經津主神は何れの界に入りても拜み見たる事なければ此神の御容貌は知らざるなり

一神仙界に入る時は四門を過ぎて清井門といへる處にて錢轉證といふ紙札を十五枚より十八枚位授かるなり一枚は日本の拾錢位にあたるなりそれを以て此界の商家

とおぼしき處にて諸物品など買求むるなりされど其界のものは一も取り歸る事かたし其中に松實とて松の若木あり其松は人間界の松と異にして其葉短く大にして平かなり其葉の間に水晶色にてすき通りたる大さ大豆の如きものを生ず其味ひは餅に砂糖を交へたるが如し此實ばかり十二三粒は持歸ることも三四度は許されし事あり偖右の錢轉證或は十五枚授かりたる時は十枚遺ふとき殘りの五枚は歸る時清淨門の役官に返すなりさて此界に歸りて後は三日の日の立たぬ間に常には役にも立たぬ器のいと欲しくなりてあけ暮れ其役にも立たぬ物の欲しさ止まらず五拾錢の價のものをも壹圓にも買ひて損耗をするなり神界にて遺ひたる錢は現界の錢に及ぶものなれば心得置くべし又神界にて賞典に授け給へる錢轉證に限り現界の錢に障なし

一明治十一年五月二十五日に我長男清明といふもの四歳にて病死す其夜俄に我子の靈魂の何れの界に入りたるにやと大に氣遣して諸の界に入りて尋ねけるが何れの界にても見えざりければ佛界に入りて尋ぬるに此界の入口の左の川原に松樹あまた生ひたり其處に童子數十人血の付きたる白きものを頭にいたゞきて遊び居たり此童子の中に我子は居つらんと一人毎に改め見るに此所にも我子は居ずて歸りたり如此童子の頭に戴きたる物は此界にて故ある事なりそれより埋葬もすみて五十一日に遷靈の式を行ふ時に我子の形を一寸現はしたるを見たりそれよりして又神仙界にて尋ぬれども汝の子の靈は此界へは來らずといふ何處へか行き迷ひつらんと思ひかへりて日を送る間に我從妹の濱田嚴彦といふへ嫁したるが其後奇病を發して腹中を苦しみて殆ど命もあやふく見えける折しも嚴彦の父往に死したりけるが神憑りして我に嫁の命乞ひを司命神に祈りくれよと切に望みけるによりて其事を諾ひて少名彦那神に願ひしかば病も漸々に癒えたり其後日を撰びて快氣の祝ひをなし天神地祇を祭りて酒宴を設け人々を呼び集へて賑ひたり其時も招きに應じて參りけりそれより七日の日數を經て余が子清明の形を緣前にて從妹の見付けて問ひけるは何とて來れるやといへば我あなたの御快氣の祝ひに就きては諸社神等に少名彦那神へ御案内に參り其時神々樣を始め數々の神靈等來り給ひてせり合ひていと面白くありたりといへり從妹云ふ此家に形をあらはし來る事の出來れば汝が祖父母親の家にはなど到らざるや清明云ふ我家へ到る時は祖父母の我形を見ば泣き悲しみて現世にありし事どもいひて歎きを重ねん故に到らざるなり我居る處は神界なれども其界の掟ありて親には其居所を語られぬなり時刻うつりたり此事

を祖父母親に告げ給へとて消えたりとぞ其後も從妹の家へは三四度も來りしと從妹より聞けり

一明治十一年七月九日の夕神界へ參る砌り大空より怪しきものゝ通行するを見たり裸體にて仰面になりたる人の身長二十間もありしと思ふばかりの男を數百の鬼形なる者の捧ぎて乾の方をさして勢ひこみて馳せ參りたり伴へる神に問ひければこは魔神のなすわざにて大人と見ゆれども惡氣を以て人形に結びたる物なればその氣に觸るゝ時は必ず流行病を受けて病死するなり虎列羅病などを流行せしむるもあの魔物の禍なりと指し給へり其見たる時は身の毛もよだちて恐ろしさいはんかた無かりき神仙に伴はればこそかゝる魔物も肉眼に見る事を得しなれ

一大空にては最細字たりとも見ゆるものにて闇夜も尙晝の如く覺ゆ

一大空を過ぐる時に俄に大風の吹き來りければ余を伴ふ神の今此處を神鳥の過ぐるなりよく見よと宣ふ程に風荒くして耳を切るが如く烈しき音して上の方より斜めになりて五丈ばかりの大鳥其色雉の如くして胸前に黃金色の輪の形ありて光り甚し頭は孔雀に似て冠あり支那國の仙界にては天雞と呼ぶなり上等の團扇は此鳥の尾にて作る天狗界の團扇は鷲の白尾に深山氷翠の羽を以て作ると申し給へり此鳥目をとゞめて見ること難ければ鳥の脊の色は如何なるや知らず其鳴く聲も知らざるを後に聞けば脊には違羽とて二枚行違ひたる羽あり一に風切羽ともいふ鳴く聲は雞に同じくして大なり地上にて昇天したる雞は數百此鳥に隨ひて行くことありとぞ

一古鷲に乘りて杉山大山二僧正の先に立ちて行く時風無くして息の出來がたき空に至る時は鷲の翼の兩脇より風吹き來るなり是には術あることにてそはある年三月三日の朝杉山僧正の部分には古鏡を八面榊の枝にかけて伊邪那岐尊伊邪那美尊を祭りてありける時に酒豆腐の饗應にあひたる時明日は月界に伴ひ行くなり其行く時の法は祕してありしが人間より七八歳の時來りたる高山寅吉に空中の絶氣の處を通るを近年をしへたり川丹先生などの空行せらるゝ時は其術は用ひ給はざれども〇〇神とて風神の御使の靈の常に添ひたれば術は用ゐずして息も自然と出來るなり我界にては人を伴ふ時は其人を鷲に脊負はせて翼の左右の脇に挾せ結ひ置く物あり見置候へ寅吉よ彼の用意をなし置けといひければ寅吉立ちて岩間の小き淵を節をくりたる竹もて探りければ泡立上る其泡を白く薄黑き袋にとり入れければ自然と其袋大きくなりければ又竹を入れて〇〇神と唱ふれば水面へ火の如き烟立

上る又其袋に入れて口をしめたり寅吉に我に其袋を見せよと云へば此袋を術なくして持つ時は袋に引上げられて絶氣の天までは自らに上らるゝなり手を放せば空に飛ぶ貴殿には渡すまじとて渡さゞりけり翌日伴はれ行きし事又彼の器の絶氣の所にて使ふ法はおぼえたれども此界の祕法なれば洩しつ

一天狗界なる寅吉は二百歳なる定期あれども此頃肉體をば錬形の法を以て錬り消し今は靈魂のみなり島田幸安栗山長四郎幽名雪岳などは未だ其肉體を存したり然れども肉體なるも靈魂のみなるも皆同樣に見ゆるなり寅吉が體を撫で見るに現世の人體を撫づるも替る事なし

一明治八年六月十六日の夜川丹先生に伴はれて信州の空を通行する時に淺閒山の方より黑き氣にのりて西方に向ひて過ぐるものあまたあり川丹先生に問ひければ現世の罪を亡ぼさんが爲に淺閒に集ひて除罪の式を行ひて歸りける僧侶の靈魂なり第一番に行きけるは釋日朝第二無住法師第三西行法師第四沙門景戒第五釋空海第六一休和尚第七親鸞上人第八沙門師高第九實海法師第十虎關禪師第十一釋安然第十二釋了意第十三彥龍藏主後に從ふ僧形のもの數十人は其從へる者の靈なりとぞ皆川丹先生に一拜して過ぎたり

一川丹先生は一名玄丹大靈壽眞人といふ本の產は朝鮮國といふ神仙界にて尊き位に坐すなり年齡は明治元年迄二千十六年になりぬと云ふ容貌は三十四五歳に見えたり支那國の仙界中督吏官許眞君によく似たりゆゑに見まがふ事あり川丹先生の惡魔射攘弓矢とて梔木と桑木とを合して二十三所かつらにて結び五元の神名を飛天の文を以て彫付けたり長さ七尺一寸なり矢は小竹の節を貫きて膽吹山の蓬を中心に入れ羽は雉尾に鷲尾山鳥の尾を用ひて三羽に作り桃核を矢の根とせり此根の仕樣は　如此なり何れの家にても此矢を作りて置く時は惡魔の害なしとぞ

一少名彥那大神の支那の神仙界へ奉迎せられ給ひし時諸神の隨行せられし中に川丹先生も隨行の一人なれば余も亦川丹先生の隨行となりて參りたる時彼界にて諸眞形圖並に符文數多神代の靈法及び寶鏡十一面拜見し其上に女仙の舞を四番拜したり右寶鏡十一面の三面は天竺上代のものと云ふ八面は元始天尊の天神に命じて鑄さしめし物といふ又右符文の中には太元生符甲部のみ諸符中に交り入りたり川丹先生の右の符を改められて此太元生符甲部三十二符中第一籙より第八籙迄は惜哉模寫せし符にて實用には立ちがたし少名彥那大神に御染筆を願ふべしと云へば彼界の神仙等慇懃に禮して願ひけれども肉體の仙にあらざれば實用少しとて書し給

はざりき彼界にては此少名彦那神を地上左部東海大司命青眞少童大君と稱へ奉れり川丹先生をば諸葛大武亨司眞君と稱へ奉れり此御名には神界に故ある事と常に聞き及びたり老子などは此界には居坐さず此界にてちらと見えしは南陽張機先生なり周の文王孔子なども此界には居坐さぬなり

一神集岳の官屬の中にて余が川丹先生に問ひて知りたる靈魂のみの神等は記式官三百神の中にては百濟川成、舍人親王、菅野眞道、太朝臣安麿、水戸西山、源順、齋部廣成、小野篁、大江匡房、谷川士清、林道春、契冲法師、加茂眞淵、本居宣長、平田篤胤大人等なり此神等は各位階異なり

一宇內の大評定の時は尊き神等は更にて諸の幽界より三人宛其界にて勝れたるは萬靈神岳に集會するなり日本人支那人天竺人西洋人種々様々衣服など異なるが參るなり何れの界の言語も此界に入る時は聞分けらるゝなり會議決定しては神集岳に其決議書を奉るかくて少名彦那大神、八意思兼神、大國主神御一見ありて　天照皇大御神、伊邪那岐尊も一見し給ひ上極皇產靈神に御使を以て右の決議書を奉るなりされども皇產靈神の其許へ參らさずして其代命を受持ち給ふ天照皇大御神の御許にて多く御許可になるなり偖又幽界にも爭鬪ありて幽中の亂狀によりては自然と現世にも及びて日本に及ぶと支那に及ぶと西洋諸國に及ぶとの差別ありて關係せる現世の國は一年を俟たずして忽ち戰爭起るなり幽界の改革もすべてかくのごとく關係したる現世の國々に必ず及び來りて自ら改革あるなり

一惡魔界へは一度も入りたる事なしされども此界の魔王どもは見たる事あり第一を造物大女王といふ面貌は白く眉長くして黑く唇は黃色にて身長一丈ばかり髮は二尺位立上りて後に折曲して三方に散別して腰にいたる天地開闢の際積陰の惡氣凝結して此女王となりしと云ふ第二を無底海大陰女王といふ面色赤く唇青黑く髮赤黑くして棕梠の如く身長七尺許りにして形瘦せたり第三を積陰月靈大王といふ男なり髮長く鬚長く素襖に似たるものを着たり第四を神野長運といふ第五を野閒閑息童といふ第六を神野惡五郎月影といふ第七を山本五郎左衞門百谷といふ第八を焔野典左衞門第九を羽山道龍といふ第十を北海惡左衞門といふ第十一を三本團左衞門といふ第十二を川部敵冥といふ是れ皆惡魔の棟梁なり此餘は西原金才、高野彭九郎を始めて皆髮は針の如く手足は熊の毛の如き物生ひたり衣服は皆破れたり是等の者幾百もあり右第四魔より第十二魔神迄には皆髮逆立ちて長上下に似たるものを服したり此の十二の魔神は常に形を變化する事をなさず西原金才以下の魔

は種々様々の形をして半身或は三目或は四手一足或は無首大足或は横面大口或は大頭一大目と種々變化して異形を見するなり異形するは皆賤しき組なりとぞ余明治十三年七月十九日の夜に魔神行列して空を通行しけるを川丹先生と共に見て右の名をも聞きてやがて書付けたり後に川丹先生に魔の住居を問ひけるに右十二の魔神は各々所を異にして眷屬を置きたり中に三本と神野とは住居同じくして天下の人民に災害を與ふるなり然るに此魔界昔分列して二界となり其界の主領は西端逆運魔王といふ流行病などは此界の仕業にして明治十一年七月頃汝に教へたりし魔は此等の部内なり此部内の魔の災をなすは日入頃に多くして日の出る前には立去り又夜分を窺ひて來るなり西端逆運魔王は地球中西方の極の積濁中の惡氣に生じたる靈なり然るに魔王といふものゝ中にては神野長運以下の魔神は吾が法を以て行ふ時は忽ちにして退くといへども造物大女王一名窮利易子、無底太陰女王一名比衛子督等には空中にて出逢ふ時は清淨利仙君を始めて吾と通路をかへて遙側をよくるなり此二魔どもは中通りの神等より其勢百倍も甚し此等の魔には近よらぬがよろしまたこの界より別れて一の魔界となる其主領は前三鬼神、飯綱智羅天、後天殺鬼なり此三鬼の中にて前三鬼神は佛界より入りたるを掌る飯綱智羅天は天狗界より入りたるものを掌る後天殺鬼は惡逆にして諸界を退けられし惡靈を掌る右の魔神の界は吾等が住める神界の爲には大敵とす人間界の者の恐るべきはかゝる魔物の妖なり右のもろ〳〵の魔物は住居と定めし所はあれども多くは空中を往來するものなり但し智羅天は天狗に入りては十二天狗の中に居ず

一明治十五年六月三日川丹先生に伴はれて本國〇〇郡〇〇村〇〇といふ淵に至る先生前より落つる瀧に「天上氣道一億萬。地道海通一十二萬。天氣地氣水氣。水靈總官海龍王之代命陰陽上下之靈神」と聲をかけ拍手して武亨十三等諸葛川丹海官〇〇命之傳命に依て到着す從者一人と申し給へば忽ち波逆卷立ち落つる瀧水逆流して青き火炎數十燃え出たり暫くして四方一面の雲霧となりて咫尺を辨ぜず時に川丹先生我手をとりて來れとて從ひけるに逆に下る事十二間位と思ふばかりにして東の方と思ふ所に向ひ行く事又三丁ばかりにして美麗なる宮に至る其時衣服を改め見るに濡れたる所なし玄關と思しきに我を止め置きて内に入り給ひ暫くして小き筥を携へて玄關に出給ふ其後方に十七歳ばかりなる美男黑き衣を着し十五六歳なる美女白衣にて見送り給ふに川丹先生我に向ひ何も言語は出すことなかれと宣ふ閉になま臭き氣紛々として此宮を出で南と思ふ方に向ひ行くこと一丁ばかり

にして此ものに乗れよと宣ふに見れば大なる材木三本蔓を以て五所ばかり結びたりそれに乗れば漕ぐ人もなかりしにきびしく流れゆく思ひをしけるに暫し時遷りて目を閉ぢよと宣ふ仰せに從ひ行く間に此材木の蔓を確と握り居れと宣ふに材木の逆になりて上る心地しけるに今目を開きて見よとて目を開けば大平海の上に出て目に見る物とては一物も無かりき其所を立ちて二十間ばかり空に登りて川丹先生海上に浮びたる材木を見掛けて佩刀を抜きて肩にかけ何か口中に唱へ給ひて其刀を上段に振り上げて下し給へば材木を結びたる蔓忽ち切離れて三方に別れ浮々として流れ行くそれより刀を藏め給ひ大空をさして登ること暫くにして又斜めになりて下ると思ゆる間に紀州熊野の山中に着きたり其時に件の筥を開き給ふに徑四寸ばかりの青黄色なる玉と徑五寸位の鱗三枚入りてあり暫くして夜已に明けて烏の聲の聞えければ先生我耳に一枚の鱗をあて玉を以て鱗に添へけるに烏の鳴く聲の人の言語の如く分明に聞えたりそれより此所をたちて南に向ひ海上の空を行く事暫くにして止まり給ひ腰より筆をとり出し給ひ白絹に似てすき通りたる物に何か認め給ひ彼の筥に結び付け給ひ佩刀を抜きて逆にして海面を探る眞似をして何か唱へ給へば大渦俄に卷き大なる穴海面に開きたり其下を見るに金色なる物きら〳〵として何物とも見定むる事能はず其穴を見かけて件の筥を投げ入れ給ふに又忽ち平なる海面になりけりやがて刀を治め給ひて其所を立ちて其日の夕方に我家に伴ひ送り歸し給へり

一天狗の日本國に其名高きは天南坊は〇〇〇〇、大郎坊〇〇〇〇〇、歡喜坊〇〇〇〇、普賢坊宇治左大臣、三密坊獻山法務大僧正、火亂坊は三井寺賴豪法印、光林坊鎭西八郎爲朝、東金坊は六條判官爲義、是を八天狗といふ又東金增源義經、元參坊悪源太義平、延山坊平將門、密角坊は能登守教經、青膽坊平知盛、歡天坊新田義興、寒榮坊柿本人麿、轉州坊篠塚伊賀守、是を九岳後天狗といふ又愛宕山には太良王子榮術天狗、駿河國富士山には四良王子尊足天狗、加賀國白山には五良王子通達子智羅天狗、江州平野山には二良王子榮飛天狗、信州戸隱山には三良王天狗、熊野山には六良王子智吉天狗、出羽國羽黒山には七良王子命師天狗、伯耆國大峯山には八良王子仁命天狗、信州秋葉山には九良王子飛頂天狗、甲斐國金峯山には十良王子道仙天狗、同國天目山には千眼大莽足天狗、是を十一天狗といふ是に象頭山金毘羅釋女及び善月光華大天狗を添へて十三天狗といふ此中に釋女を以て主領とす釋女は十二天狗の形を一人して現ずるの德ありまた奥羽にては東郎

天狗、東烈天狗、安倍貞任、同宗任なり九州にては西釋天狗筑紫五郎、阿波國にては南波天狗、玉良天狗、忌部義清、同時成、出雲國にては北角天狗、伊豫國にては大羅天狗、飛郎天狗、此三の天狗は其名しらず又三火坊、城石坊、西岳坊、九穿天狗、龍豪天狗、五精天狗、東元天狗、義泉天狗、參平天狗、霄令天狗、臨明天狗など云ふは右の十二天狗の中の異名なり又常陸國にては十三天狗過半は僧侶の化せるなり杉山僧正、立山僧正、長樂寺慧慶などは此中にあり常には岩閒山と云ふに住めり同國加波山には五十六天狗あり其中には將軍太郎良門、稻葉五郎實時、樋口次郎兼光など其中にあり又山城國鞍馬にては右の八天狗並に十八天狗あり此中には大山僧正弓削盛久、藤井大僧善長、剛清坊源頼朝などあり下野日光山は十六萬の天狗住めり此界の天狗は如何なる故にや鰹節、田螺、海鼠を好む事あり、又魔界の中にては天狗といふは天狐、老魅、魑魅、土公、大歳、狗賓子、愛魔天狗、嬉魔天狗、罪魔天狗、行魔天狗、惱魔天狗、蘊魔天狗、天魔天狗、魔鬼天狗、大災天狗、釋魔惡鷲天狗などいひて賤しき中にも人閒の位の如き位名を各々つけたり此中には大納言また芝空三位など云ふ名もありまた天狗中にて居住する處の入り替りもある由なり偖又此外に支那西洋にも天狗幾萬といふを知らず

支那には上代よりの天狗多し又鷲などの化せるは何れの天狗界にも多し此は使用に置きたるなり鷲天狗は其形嘴長きは雄なり短きは雌なり嘴色先き黑く眼の方へかけて紺色眼は黃赤く大く眉閒は薄紅にして毛なし聊上に猪の怒り毛に似たる毛數十本生ひて自然と眉の形をなす頭上には角に似たる立毛あり耳の穴より長き毛數多さし出たり腹の毛は鼠色と白色と黑色と交りたる中に黃色の點あり翼は大く長く鼠色にして金色の山形あまたあり背に上に向ひて牛角の如き左右に立ちたる毛あり尾は白と鼠色と交りたり足は青くして足裏は黃色なり此天狗どもは人化の天狗に賴みて毎年五月十五日に幣串を立て素盞嗚尊、天日鷲尊を祭るなり

一惡魔の中尤も下界を罰靈界とて惡魔中の上等の界へも佛魔の界へも入る事を許さざる苦界あり神界佛界何れの界にても極めて積惡無類の者は此界に謫せられて出る事を得ずして盡きざる苦みとて一日に二度一夜に三度づゝ受くるなり此界に支那國の產にて死後の靈魂の入りたるは九十三名此中にて三十六靈は最も苦みを受く日本國の產にては七十八名此中にて蘇我馬子、蘇我入鹿、北條高時、北條義時、足利尊氏、弓削道鏡などは尤も苦を受くるといふ天竺の產にて百六名西洋各國の產にて六百四十九名此外主を害し父を殺せし者の靈數を知らずと川丹先生萬

國のことゞ〳〵其入りし人靈の年暦月日其名をも誦唱し給ひ神界の年號と其界の年號と日本現世の年號とを比較して教へ給ひしかど多端の語にして闇知もなし得ざるなりされば其界に入りたる人靈の名をさへに多く忘れたり然るに我に諸の界の掟又は其界にて行ふ業も毎々教へ給へる中に恐るべきは宇内の幽界の毎々改正あり其際を大に氣使ひて心安んぜざるなりと宣ふによりてそれは如何なる事のありやととひまゐらせしかどこは幽府の掟によりて汝等には告げ聞かされじと語り給はざりしが近き年には日本にて身終る者ありて右の苦界に墮落する者も四名ばかり退妖官中の死籍簿籙にて見ゆと申されき

一高山白石平馬又定元知坊とも云ひて杉山僧正坊が隨從の一人にて寅吉の事なり此者の招待によりて我を迎へけるに團扇を振りて空に登りけるは通常の事なるが大空より常陸國を團扇に付きたる望遠鏡にて見定め置き團扇を以て其國を指して行きたりしにねらひ外れて信州妙義山の側の樹木茂りたる天狗の住める山中に來りたるに十七天狗の出向ひたる時其團扇を左の方に置きて一禮しけるに十七天狗のいへるは團扇を使ふ式を知らざるものにて團扇は凡の天狗の持ちたる類にはあらずして上品なりされど其團扇を持つ位あらずとて其團扇を取上げられたるに寅吉青くなりて云ふ我も團扇を使ふ法は知りたるに如何にしてか目的の外れし合點ゆかず團扇は師に暫く借りたるものにて大切の品なれば是非共返し吳れよと云へば此方よりして師杉山君迄は返し申すなりとて寅吉には返さざりける間に余も詞を盡して種々樣々申せども返さず如何になるやらんと見ゐたるに大空より火の棒其所に下りたるによく見れば小き竹に火燃えたり十七天狗のいふ御矢落ちたり尊き神來るべしとて十七天狗恐れ怖きて寅吉に何もいはずして團扇を返したり暫くして西の方より空を鳴動して烈風卷き來りて寅吉が持ちたる團扇は風に卷き上げられて其行方しれずなりき暫くして大雷鳴りはためき大雨降り來り岩屋に入りて休息する間に十七天狗を始め寅吉も余も如何なる事出來つらんと恐怖してありける

に杉山僧正坊日頃帶したる招雨劒を拔きて右手に握り十八人に鷲一疋を供して來り給ひて眼色に怒りを含みたまふに十七天狗は大に恐れたるに寅吉の誤りなりと申されて寅吉及び我を伴ひて古鷲に脊負はせて常陸國岩閒山に至りて栗酒、柿酒に薯蕷にて作れる物を出して大に飲食したり寅吉は其時隅にこもりて其酒宴の場へは出ざりければ寅吉の誤りを赦し給へと云ふに羽團扇は大切の物にて又其使ふ業は極めて大事なり我が寅吉に暫時貸したるは生涯の誤りなりとて寅吉參れとて

其場へ呼びたるに寅吉は青き顏も少し直りたり川丹大靈眞人の愛し給ふ水位氏を招待のために汝に貸したるを羽團扇を使ひ誤りたるは水位氏へ無禮なりと呵り給ふ其氣の毒さいはんかたなし寅吉我に向ひ挨拶を其時に始めて述べたり其時に彼の妙義山の側なる十七天狗は名を何と申候やと問へば十七天狗の中にて青龍天眼坊といふが彼山の主にて餘は其眷屬にて其名を知らずと申されたり暫くして日西山に傾く頃我村里まで送り返し給へり時は明治十五年六月二十五日なり

一川丹先生の上代の古圖を模寫するに就きて支那神仙界より十七名圖書の上官並に天界の記圖官人を招き寄せられける時我も側にありて其人物を見たり我其名を皆筆したり其模寫を命じたるは八轉八會五化結氣玄黃圖八十一枚、結化混成三變圖三枚、五元大空九變靈圖九枚、都合九十三枚なり其模寫役の指揮には神集岳の記圖官三百餘人の中の玉女李慶孫圖書の人名は永文史華現世の名は郁奇、五峯德現名伊天麿、陽生延現名路從廣、河角良現名彭行先、宇精玄現名張邦岱、四方圭現名趙延珪、岳生雲現名陳廷敬、冥化元現名劉沂春、大方經現名李治運、應易道現名林惠武、五良永現名陸鳴時、貞正元現名王岱、靈景形現名高層雲、鹽良生現名夏大易、霞生童現名吳士虔、彭向延現名沈聖昭、玄極現名朱國盛なり此模寫役には上下あれども得たる所あるを以て招き寄せられしとぞ右の九十三枚の諸圖一夜の閒に寫し竟へたり其黎明に各に桃酒を賜り其褒賞として紫色佩玉六十八を賜ひ李慶孫には叮嚀に禮したり彼界への送り物とて長さ一尺の平玉佩三百二十枚を箱入にして十七名に渡し給ふ日の出に皆川丹先生の幽宮を退きけり此中李慶孫は肉體にて餘は其靈魂なるを彼界にて更に形を結びたる仙等と川丹先生の申し給へり

一筑波山の月張法師、比叡山の法性坊、伯耆の大山の異生坊一名伯耆大仙坊、土佐奥矢筈山の長歌坊、松靈僧正、神野坊、藏野坊、福神野僧正、高山野坊などいへる天狗は奇術をよく知りたる故に其眷屬は種々の法術を行ふなり且つ大山僧正と伯耆大仙坊とは愛宕、東叡山との二所を住居と定めし故に互に往來をなして入替り居たることもありとぞ如此天狗に伴はれ行く時は市街及び人の群集する中を步みても人には形は少しも見えざるなり然るに天狗界には五行とて夏は火の行、湯行あり冬は瀧水の行、呑氷の行あり秋の頃にては斷食の行ありて肉身にて入るものは多くは此行をなす其苦み死するより甚し故にかゝる界には入らぬが肝要なり偖又天狗界にて中に山人と唱へ呼ぶ限りは障礙は爲さず下賤なる行人幻妙天狗、羅官幻妙天狗、宗達幻妙天狗、骨冠幻妙天狗、印主幻妙天狗などいへる類は人に

災害をなすなり其災害を爲す狀は第一番に遠き所にて害を爲さんと思ふ人を幻通三化印を結び次に一本の指を以て其人の方に向ひ平轉野、閉氣野、折陽野、三氣野、四靈と云ひて指先にて左より輪を書き其れを漸々に小く□如此なして輪の廻り止まりに至りて指を前に突き出し又右よりも□如此するなり次に左足を上げて「ウハアン」と云ひて踏みしめ「ウン」と云ひて右足にて蹴る狀をする時は其人忽ち倒る其人の心持は石に躓きたると思ふなり又勝向といふ印を結び其指の間より息を吹きて「アミウン、ザンダラリヤ。ウン」と呪言して次に我に對して何か云はん汝に對して我も亦云はん風鬪火爭口論忽ち發す「アミウン。ザンダラリヤ。ウン」と唱ふれば道を行く人行き當りて喧嘩口論を互にするなり又群集の中にても側の人より失言して終に喧嘩となるなり常人も途中を往來する時に不圖腹の立ち或は酒にゑひたる時に人と口論したき節は指先にて件の輪を廻り止まりより解くが如く左輪右輪と書きて十の字を書き「○○○○○。○○○○○。○○○○○」と目を閉ぢて云へば心魂鎭まりて件の害を避くるなりさて右の幻妙天狗などに伴はれて佛界に入りたると思ふ事ある時は眞の佛界にはあらずて其界をかりに幻法を以て現ずるものなれば狐狸の類に化されたるも同樣なりといへり此界の天狗は折にふれては人間となりて市街に出で物など買ふ事あり然るに何の界にても金銀銅錢の類は多し又神界佛界仙界いづれの界にても其界に居る人名を唱へて○○○神取次ぎ給へとて拍手して膳を供ふれば忽ちとゞくなり是には故由の三條ある事なりさて又幻妙天狗などは現世の書家畫家の手を借りて物をかゝせることあれども其人は少しも知らず晝寢などしたる思ひをする由なり

一天狗をはじめて魔道に至るまでも雞冠石を粉にして輕粉、烏賊魚の甲年魚の骨四味を合して烏賊魚の皮に入れ蔭乾にして門戸梁柱に掛くる時はかゝる類の害なしとぞ偖山城國鞍馬山、土佐國石鐵山、足摺山、阿波國箸藏寺山の谷間並に角峯等に住める天狗の中には猛勇なるがありて人を引裂く天狗あり其は自身の手を下してするなり此天狗界の中には五十印とて印一つに歌に似たる文一首づゝ付きたり印と云ふものはこの五十音より外には功能ある印は少し五十印中にて大切なる印は福加吉、甲要正、淸加仁、瑞淸、自主印、三加吉、吉加光、近勝初、先進、進都筒、白照光、樂加主、神加緣、擧月、阿克主、七加秀など名に負へる印は大切の印とて容易に眷屬どもには敎へざるなり余は故ありて此五十印の結方及び其歌も皆書きとめ置きたり

一西洋國のヒマラヤ山には支那國上代の神仙界ありて西王母の住み給へる山なり此山は八合位より上は木なく中凹なり西の方に穴あり山上は闇夜も晝の如くこの山は仙界にて地軸とも呼ぶなり此山へは日本國よりは大劍小劍の天狗八合位へは度度食物を採りに來ると云ふ山の全體は少し傾きたり此山には珍らしき鳥數々あり又支那國仙界よりは位階の事につきては此山上に登らるゝと云ふ此山上にては殊の外磁石を立てゝ方角を窺ふ事を忌むなり是には神仙界にては大に由緣のある事なり是によりて日本支那にても高山の上は忌むなり

一諸國に數多ある大穴へ入るには婦人の常に持ちて使ひ馴れたる櫛に火を燈して行く時は穴の内に物の住み居る時は其形を現ずるなり又其燈火の消滅せば這入らぬがよし毒氣に觸るゝ事あり其毒氣は大蛇の氣と地の毒氣にて大蛇の毒氣は味噌を鼻の先に着けて入れば其息氣忽ち消滅す又地毒の氣は紙を散らさば其落つる事遲し是を以て其毒氣あるを知るなり山石とて赤き石の穴には冬は大蛇の住む事ありて赤石には大穴少く白石には大穴多くして四時大蛇の住むことなし土穴は容易に入る事なかれ下賤の天狗の巣に非ざれば極めて大蛇住むなり又穴の中に瀧ありて淵のあるは龍神住みて害はなさゞるなり且又乳石の下りたる穴は石炭に燒く石にて大蛇地毒等の害は更になし又穴中川あり上より雫落ち風強く吹く穴は燈火消滅するとも害なし蝙蝠のあまた飛び通ふ穴も害なし又穴の毎々風は聊か吹くものなり又大蛇の住む穴は暖にして息氣あり又狐狸の穴は小にして穴の口に糞あり

一諸の界に入りて歸りたる時は二日を經ぬ間に其入りたりし有狀を記せざれば三日を過ぐれば惰氣になりて漸々に夢の如く思ひ十日も過ぐれば祕事は忘れて仕舞ふなり又彼界を歸りたれば必ず二日の中に記錄することは忘るゝなり是には故ある事なり尤も天狗界のみは紙筆を持行き記したるが多し

一幽靈の墓所にて形を作る時は夜人の寢みたる頃墓に炎燃え其火消えて白き帽子に似たるもの土中より拔け出てそれより人の形となりて通常の人の如く歩み行くなり又墓所より火玉となりて思ふ所に飛び行きて其所にて形を作るもあり又靈魂の弱きは風の吹く夜は形を結ぶ事かたし又幽靈の形より後の物のすき通りて見ゆるは魄靈少くして魂の靈多し又幽靈を脊に負ひて重く或は手をとりたる時人間の如きは魂魄十分に合ひたるなり故にすき通りて後の物も見ゆることなし我も幽靈の賴みによりて負ひたる事も手を取りて行く方へ導きたる事もあり又墓地には火燐出て其所のみ晝の如く見えて暫くして闇くなり又炎燃え其側より白き帽子の如き

物出で人の形となりて其所ばかりは草木の葉もよく見えて暫くして又人の形は消え帽子の如き物殘りて其帽子より雨の如く小き火となりて落ちて後闇くなるは形を作らんとして作り竟へざる靈なり是を側より見る時は氣味惡く身の毛もよだつなり新墓所等には儘あるものにて月の出ぬ曇りたる夜などは折にふれてかゝる事あり

一神仙界の笛は昇雲笛、拂雲笛、雨龍管、五精管など云ふ名ありて皆作り方異なり佛仙界には夕星笛、玄通笛、昇極笛など云ふあり天狗界にては八丈笛、星月夜、火龍、朝嵐、霧攘など云ふあり以上皆横笛の名にて作り方名異なり魔界には横笛はなく竪笛に五龍管と云ふあり

一天狗界にて雨を祈るには山人と云ひて人閒より入りたる天狗主掌の何坊何僧正など云ふ類の祈る時は高名なる淵の側に坐して水柱と唱へて手を一つ拍ち龍柱と唱へて一つ拍ち次に印を結び「高靈、闇靈、水靈、火靈の神、天水分、國水分、天匏持、國匏持、男龍、女龍、河伯、海伯、鳴雷、水雷、火雷、男女風伯、雨師、水元伯の諸神」と唱へ次に天に水あり地に火あり火は水に依りて燃え水は火に依りて動く風是れが導きたり四龍は四方より集り二風東西より來り二雷上下より合し河伯川より起り海伯海より通ず諸靈茲に集ひて水脉を開く靈の荒靈謹みて雨を願ふ「〇〇〇〇〇〇〇」と唱へ空を向きて天御柱國御柱水分の二靈と唱ふれば忽ち淵に浪逆立ち風俄に生じて黑雲忽ち起り水は玉になりて上り大空に棒の如く上り雲先八方に亂れてそれより雨降るなり此時手を二つ拍ちて再拜して後へ三足しさりて其所を立ち退くなり是は人民の爲にすると云へり右の呪言は定文言なり

一支那國の神仙界にては歩行の初に諾皐禹歩法、易卦離火法といふ足踏をするなり又佛仙界にては普羅漢歩といふ足踏をなす天狗界にては進退七數歩といふを朝日に向ひて進み日光を含みて退く法あり又支那神仙界佛仙界天狗界にも九字あれど其切り方皆異なり九字の始まりは神仙界が元なり又九字の替りに黑米と大豆とを交ぜて擲つ事あり皆惡魔拂に用ゆるなり

一天狗にて肉體のものゝ養生といふは德利に八分目位水を入れてきびしく振る事數萬にして其水を出せば熱湯となるそれに田螺の干物を入れ暫く置きて取出し食ふなり一度湯に入れて其肉をとり干したる田螺は火を以て燒き沸かしたる功なしとて水を其まゝ湯にするなり又熱湯を德利に入れて其口をつめ忽ち淵に投じ二時許り置き出して極寒の水の如き冷水をこしらへることもあるなり

一神仙界に入りたる人に食物を送らんと思へば其人の名を呼びて何處にても供ふる時は神仙界に居る人の眼前へ其物忽ち現ずるなり其を食ふ眞似をして腹張るなりこれは供物の正氣を食ふともいふ又現世にて供へたる品は調養司と云ふより其供へたる品の替りとて寸分も違はぬ品を渡されて眞物を食ふ事あり又旅行したる人に後膳をするは此理より起れるなり

一神界にて死期を尋ぬるは大なる忌み事にてそれを強ひて尋ぬる時は何月何日に死すと云ひて年數を云はず又無理に年數を尋ぬる時は今現世に居る何某老人の死する年月日と同じ其人死すれば其人の死したる年に至り其月日に死すといひて強ちには死期をいはずこれは極めて神界の祕密なり余此事を川丹先生に尋ねたる時に少童君の御怒りを互に受けたる事あり是は深き幽理のある事と思ふ由なり

一天狗界と惡魔界との中位の界に震勢大力天狗といへるありて戯れに大磐石を起し大木を拔き山上より大石を轉下し礫を以て大木の枝を打折り其力の強き事實に鬼神の如く此界には昔の英雄と稱したる人多く中には生きながらにして居るもあり皆猛烈にして其勢甚し陸地の上を飛行する時は其下は大風吹き通り海上を通る時は其下に浮べたる船なども沈まんとするばかりなり又其空を行く時正面に向ひて

其氣に觸るれば忽ち熱病を發す此天狗の眷屬には獸身にして翼の生じたるも人身にして翼の生じたるも鳥にして手の生じたるもありて其勢亦猛烈なり此界に限り十二月晦日に當りては幣串に綠色の玉を十二ケ付けて手力雄命を祭る其祭具には劍一口、弓三張、矢十二本、栗、板昆布を以て祭祀を行ふなり此界の天狗の中には明秀法師、傳蓮坊、鏡月の三人のみ僧にて餘は武人なり此明秀法師は十人にして七つの名あり秋劍、德龍、大野坊、厭敵坊、張玄坊、三變坊、水亂坊ともいへり武人にては大伴子蟲を始めて以下百八人あり川丹先生云ふ此界は故のある界なりと

一肉體と分魂と分れて一時に二所に行きたることあり其時には肉體と分魂と自身には取り分ちがたく只一所に行きたる思ひして夢現の如くなるを二所より歸りて合したる時に至りては忽ち詳然として二所に行き用を便ぜしことを儘かに思ひ出すなり二所へ行く途中にて知る人に行き合ひて一禮したりしに日を經て其人々にあひければ過日は何所へ行き給ひしやと云ふに側より一人云ふに其日は我に何所にて何時ごろ遇ひたりと云ふ又側の人我も亦何時頃に遇ひたりと云ひて二人に遇ひしは同日同時なり之れ肉體と分魂との二つになりて二所に至れる時の事狀なり

一川丹先生の云ふ幽冥は闇き所に明く又理にも極めて明かなり現界は明に似て其實は闇く又理を明に覺ゆるに似て其理眞に闇し此故に幽冥の理現□は疑ふ事ありと申されければ東岳隱光大靈義官大壽眞人上席より川丹君の汝に申されしは眞に理言にはあれども其意味を通じ物に感格を生ずる能はず我も申し聞かさん幽冥は極めて明なる所にして其明なるものゝ度を過ぎて現世の人の見る時は闇くして肉眼は晝ばかりの能に止まる幽の明なるは更に其越度の闇きに眼の及ぶことなく又現界明にして其明なるが過ぎかへりて暗く故に現世の事にも幽界の事にも大に迷ふなり幽界より現世を見る時は明にして其物の知られぬ事はなきなり又現世より見る時は幽の明の過ぎたる闇きに掩はれて物事見えぬなりと申されけるに川丹先生の云ふそれほどに事を長くいへば其理の意を達すれども短言にしては事の凡人には解し難しされど長言より短言にして解し易きは便にして智言と申すとて闇處に燈火の例を引きて說かれたるに大靈義官大壽眞人笑ひてそれは人間にてもたとへに云ふ事にて童子も皆知る事なり然れども其理は叶ひたりと申されければ又川丹先生も手を拍ちて笑ひ理に叶ふ語こそやがて正言といふものならめと申されければ眞人も先生も互に笑ひ合ひたることありき

一天狗界に火矢とて竹の三尺許りなるものゝ節を拔きて焰硝に瓢の灰の等分に交ぜ茅の花を以て燒酎を錬り合せ右の竹の中に詰め日に干して其を用ゆる時は大空より下らんと思ふ界に火を付けて落すなり其火矢の落つる時は俗に云ふ火玉の如し此火矢の一名を先打矢とも云ふ神界にも同物あり此矢を投ぐる時は至極大事なり余此矢を用ひたるに矢に火を付けし時誤りて手を燒きたり其時に川丹先生の藥を以てこれを付けよとて付けしかば二日許りにして全治したり後に其藥を尋ねしかば蒲花を柊の灰に交ぜたるものなりと申されき

一〇〇神、言傳神、來去神、使神、龍畑神、火入神など云へるは風神の御使なり火矢を用ひ遙かに言を告ぐる先には此神名を唱ふるなり川丹先生云ふ此中〇〇神は風神の荒御魂なりと

一途中にて異人にあひたる時に行き違ひて後を看れば忽ち其形を見失ふなり其行き違ふ時に異人に目を付け乍ら漸々に看れば其形も見ゆるなり瞬きをなし或は俄に見る時は其形見えざるなり或は天狗の美女となり山伏となりたるなどは鏡にうつす時は其正體の見はるゝなり

一雞冠石などの毒氣を天狗の消す法は味噌なり之は僧正坊などの類にあらざれば知

らずこは天狗中の祕事なり又雞冠石を手足の爪鼻穴耳穴に付ける時は流行病の傳染に罹る事なし

一天狗の災を民家になさんとするには大空より鳶の毛に血を付けて竈所の煙出しの穴へ落し入るゝなり二日の内に火災起るなりかゝる類を高津鳥の災とはいへるなり又梟の羽に蝦の殼を付けて落す事ありかゝる災を除かんとするには正月に用ひたる橙を煙出しに釣りおく時は諸鳥の毛風に誘はれて入る事なし何れの鳥の羽にても入る時は惡く火災なければ家内に必ず口論を生ずるなり

一神仙界にて詩歌などを作り詠ずる事あり歌は其調高く紙に書するは假字遣ひも宜しく音に明なり然るを天狗界にては歌其餘の物に至るまでも書するに篆字草字眞假字平假名幽界文字をも交へて書する事あり又草字と平假名とにて今の世に人間の書くが如く書するも多くあれど大に假名遣ひの違ひたるが多し又呪言の歌などには其詞の音便にたがひ假名遣ひも違ひて歌とも詞ともわきがたき文盲者の仕業の如く見ゆれども其假名を正しく歌の格に入れて直す時は其呪言の禁厭却て靈驗なし故に強ちに直す事勿れ

一神集岳中天輪館第三臺大番場にて朝信禮を行ふ時に數千の仙官人參朝する中に川丹先生も五勢先生も參朝ありて其常例の式も終りて來仙は皆一同に鸞龍班橋定眞英臺に退きて休息ありけるに東蒙四寶靈海曲館代理玄角大眞人の從者一神と川丹先生五勢先生の從者二神と如何なる事か大議論を發し喧嘩となりたるに二神して一神を論破せしに其事終に川丹先生五勢先生玄角先生の耳に洩れ聞えて大論を釀せんとするに至りて諸の神等御取持によりて其夕に至りて參朝神等殘らず天輪第二等臺館中の評證場に於て少童君より賜り物あり酒宴を開かれたるに其有狀は現界の懇親會に同じ此時仙女五十一員連りて舞を拜見したり其時の歌は十五條ばかりおぼえて別に書記せるものあり

一海中より龍馬に似たるものゝ青光を放ち電光の如き中に彷彿と現じ海面潮煙となり晝も尙月夜の如くに見えて龍馬と思しきもの三疋大空に登りたり暫くして大空より黑雲俄にきら〳〵と舞ひ下りて海上に垂れ其雲の棒の如くなる物の其れに金光のきら〳〵として鱗の如きものと火と打交りて浪を卷上げたるを見たり川丹先生に問ふにかゝる類は皆龍の屬なりとぞ

一備後國なる比熊山には山本五郎左衞門百谷、神野惡五郎月影、並木權六郎東萠、大森左傳太登康など云へる惡魔の立てる所にて大杉といへる木の上に光り物ある

時は此山に必ず風氣あり此時は大杉のあたりを通るべからず又同山大杉に近き所に平なる岩あり此所は景色尤もよくして麓の川を見下してよき所なり俗に天狗の遊び場といふ又魔處といふ之には夜々北海悪左衛門東流と云へる悪魔の休息する處にして悪しき處なり川丹先生に聞けり

一其國は何處なりけん思ひも得出さず忘れ果てたるがそは世の人の乳母ヶ峯とも乳母ヶ岳とも云ふなる山奥にて十四歳許りなる美女に逢ひたるに川丹先生の云ふ前に來る娘は俗に云ふ神隠しとて天狗界に連れ行きたるものなり今は月經のあらんとする時なりければそれを知りて親元へ還し送る路なり其娘こそ不便なれ我連れ行かん事は易けれども彼界に入りたる女は手にかけぬがよろしとて逢ひたる儘に行き違ひたり見れば僧侶と思しき者の藁包を提げたると彼美女と二人に見えたり其時に天狗界の者の僧侶と化して美女を送り行くと見受候が彼界にても女犯どもはあり候やと先生に問へば曾てなし彼界の數多ある中には新參の童を以て男女するもあるなり此は彼界にて彼等が私にするなりと宣ひたり

一出羽國秋田男鹿島に神石窟といふあり大なる穴あり此穴に入る事十二閉ばかりにして平地あり奥の深き事知り難し左と思ふ方にも穴あり此穴は暖氣なり川丹先生の云ふ此穴は海神の住み給ふ處なり其神體を汝等拜し奉らば恐るべし人形とは大に異に見ゆるなりと宣へり此石の質は内裏石に似て白きに種々の色の經あるなり此あたりの岩には珍らしきがあるなり

一越中國新川郡なる立山には佛仙界あり天狗界あり神界あり麓には神社ありて伊弉諾尊を祭れり山九合位に鎖一ヶ所あり上は岩出たり穴あり池も二つあり瀧もありて猛火の立つ處も亦一ヶ所あり川丹先生云ふ此山に限り幽に入りて此山の界を見ずして現人の目にて見る方が尤も景色よろしく見ゆるなりと我を血の池といふ處にて景色を見せたるに右の界が何處にありとも見えず北方に嶮岨なる岩針の如くに立ちて殊の外に目を驚かすばかりなり之を劔山といふ偖年を經て後に或人に聞けば山上の祭神は手力雄命にて北の卑峯には大汝貴命別山には　神南方淨土山大日如來を祭ると云へり

一國々の名山高山の幽界は毎々見て別に記し置ける書ありしに其中には人間に洩されぬ祕事も多くありて其書を人に見する毎に熱病を七日ばかり發する事はいつもたがはず故に去る明治十六年一月一日に燒き捨てたりされど多くは暗知したる事もあり人に語らんとする時は夢見たるやうに思ひて順序のたゝぬ事あり其人去り

て後には明白に思ひ出すことは常にあるなり

一伯耆國大山の天狗界には横山左門といふ天狐ありて大山僧正に似たるやうに化れるなり此狐は大己貴命の使なりと云ふされど僧正より其位遙かに下等にて今迄飛行などもせずといへりこれは狐の年を經たるが天狗界に入りたるものなり

一○○○○○○○○○、○○○○○○○○○、○○○○○○○○○、の代命にて日本國の天狗を掌りたるは○○○○○○○○○○○○○○○○○○○命、○○○○○○○○○命、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○命、○○○○○○○○○命、○○○○○○○命など申す神は朝拜の時々は必ず拜すべき神なり又此神等神憑などして正心の人の信仰によりては種々の奇術を敎へ且つ著述などする人には心に憑りて發明なる事を思ひ出さしむる神なり

一天狗界中には芝塚兵衞、宇都宮古六郎、一閑沖姫、岩長老齋、於兎龜老、金長、石原玉姫等は阿波國の古狸の名なり横山大生と云ふは伯耆國大山に住む狐の名なり磯崎芝右衞門道昌といふは淡路國の古狐の名なり東原源五郎、小女郎、目白といふは大和國の狐の名なり天狸老とは同國の狐なり萱中宗語、髮床姥、天村九郎時童などいへるは山城國の狐なり馬關於玉と云ふもあり御杉少將といふは羽後國の狐なり八島の兀といふは讃岐國の狸なり竹内八助、立石味塵之助、吉村權九郎、玉島隼人、片桐文之丞、磯上金角などいふは土佐國の狸なり行風と云ふは三河國碧海郡上和田村の犬の靈なり小佐利團助と云ふは美濃國御岳の狸なり處之進と云ふは近江國大津の狐なり玉姫御前とは信田森の狐なり伊豫サヽイガ瀧於サン狸、松山の金平狸、尾張萬松寺於小女郎稻荷、吳服丁豐桝稻荷、右の内には身體にてあるも亦魂のみもあれど天狗界の一部分に入りたるものと聞く此外にも百あまりもあれど其名をわすれたり

一南陀天王、三界天王、氣勢大靈天子、五行感太子、流侶大神摩利子天王などいふは其實はなきものなれども此名を唱へて五人以上集りてかへす〳〵一時間ほど行へば空中にさまよふ靈のよりかゝりて驗を現はすこともあれどよろしからぬことなり又此名のみに限らず作り事にても唱ふるときは遊魂魔物の憑るものなれど右の南陀天王云々を唱へて漂遊する靈をよびよするはたゞの作り事を唱ふるよりは早く來るなり然るに南陀天王以下五神の名は其根元はなきものを惡魔をよせんが爲に僞作したるものなれど今は漂遊の靈を寄するの神名となりたり又魔物遊魂も我等を寄せ呼ぶの名と常に思ひ居る故に天狗狐狸惡魔漂惡などの類も南陀以下云

云を唱ふれば來るなり此外にも天狸梵王、三界萬靈天子、大運大師などいふ僞名もあり

一川丹先生に伴はれて東國の上を飛行するに夜中なれども大空はあかく晴れたる如くなれども地は闇く見えたるに一つの火玉現はれて川にうつり矢よりも早く水上を行きけり川丹先生に問へば此下は勢州壹志郡川俣川なり彼の見ゆる火玉は藤原千方といへる人の靈魂なり今宵は地氣の雨を催したる故に空よりもよくみゆるなりと宣ひけりこれは深き故あることにて又事のついでに語るべしと宣ひき其後此由緣を語り給ひければ別に委しく書きつけ置きぬ

一明治十五年六月の頃川丹先生に伴はれて遙かに南海を飛行し時に海上に嵩あり嵩の中に池あり其色墨の如く此嵩に下りて池岸を歩するに周廻三百十二歩あり川丹先生池岸に立ちて〇〇〇〇〇〇〇〇と唱へて手を八つ拍ちけるに左右に渦の卷き出してやう〳〵にうづ高くなり六閒ばかりにして又漸々に卑くなりて穴二つとなり左の穴よりは白き鱶に似たる魚長さ三尺ばかりなるがおよぎ出で右の穴よりは薄赤き鱶に似たるがおよぎ出でそれより渦はなくなりて池上平になり二つの魚尾鰭を振りて池の側を三廻して電に似たる光りを吐きて二魚海底に沈みけるが暫くして目の太さ四圍ばかりなるが四つきら〳〵と光りけるによく〳〵見れば大魚なり川丹先生のいふ是れ海神なりとて二拜して手を八つ拍ちければ忽ち大魚消えて見えず暫時にして巾四尺許りの白色にて紅色に緣をとりたる海苔長さ三閒位なるが浮び出たり川丹先生其海苔をとり上げてきり〳〵と卷き三折にて太刀の緒を以て結び給ひ此品は海神より賜はりし物なりこれを以て來れとて其所を拜して空に上り給ひけるにやがて下を見れば今迄ありと見し嵩はなくして一面平なる海上となりたりそれより遙かに南に向ひ行く閒に暖氣強くして甚だ堪へ忍びがたき處を通り暫くして朧夜にて冷雨のはら〳〵と降る處を過ぎて氷山といふ所に至るに瀧あり其瀧に件の海苔を漬け給ひけるに硝子の如くすき通りて白色となりて紅の色は消え失せたりそれを又卷きて北に向ひ斜めに空に登りけるが又南に向ひたる心地しける故川丹先生に問ひければ矢張北に向ひたるなり汝が南の如く思ふは日輪を常に南に見て北には之を見ざる故なりと宣ひたり暫時にして煖熱の所をも通り拔けて又日を後にして何處とも知らず海中にある放火山の上にて件の海苔をあぶりたるに縮まりて巾二尺長サ三尺ばかりになりて黃色と變じたり其質和にしてびろをどの如し其時に此海苔は如何にして食し給ふやと問ひければこは食

物にはならず幽中の寶器を包むに之ならでは年久しく保つこと難しと宣ひけり其處を立ちて東と思ふ方に向ひて斜めに空に登りて暫時にして我家に送り還し給ふ此時は如何なる事にや耳痛みて四日許り物の音も聞えざりき

一羽前國の人にて竹内某とて玄角大眞人に伴によりて神仙界へ安政二年の頃より出入する人あり其人の根元は常に太上感應編を誦讀して行ひ正直にして父母に孝敬し神仙を慕ひ願ひ朝夕空に向ひて大祓詞と太上感應編とを誦して幽冥に坐す神仙等とて拜禮する事怠らず遂に感通して玄角大眞人の伴となりたるが彼界にて竹内氏の字を感應壽眞といふ此壽眞の云ふ罪科を祓ふの術は改心して後大祓詞を誦し神祇に罪を謝するに止まり修身の要は感應編を誦して行ひを正直にするに止まると云ひて我にも此編の誦讀を頻りに奬めたり此人の常に詞を使ふ毎に云く道は何に止まる義は何に止まる靈魂は何に止まる此趣旨は何に止まるとて詞の終りには必ず止まると云ふ事を云ふが口癖にてすべて詞の終めに止まると云ふ詞の出ざるは一つもなかりけるが或日下等の神仙等數多會合せしときに此壽眞を止まるの壽眞と呼びしに一座の神仙等一度にドッと笑ひて暫し止まらざりしに此壽眞はキョロキョロとして不審顏にて苦笑を少しなして皆笑ふに何故笑ふとも知らず皆の顏

を窺ひけるに又皆の神仙等も下等の輩は尙笑ひ彌增して此壽眞の面を見ては笑ひけるに暫くして此壽眞大に腹を立て眼を怒らし四方を白眼み廻して今水位眞の云はれたるは何の事に候や再度承りたしと切齒をなして云ひけるに我貴殿を以て止まるの壽眞と失敬に申せしなりと云ひければ忽ち此衆は暫時笑ひも止まりたるに又再び笑ひ出し仲裁する眞人もなくて大に困却し挨拶を種々致せども聞入れず終に玄角大眞人と川丹先生の聞に達して水位を始め笑ひたりし眞人は皆御叱りを蒙りて當日限り其席を退けられたり

一天線とて天より貴賤上下を論ぜず家々に垂れたる氣あり其氣の盛衰によりて家の盛衰の見えて知らるゝなり此氣を現世にて見知りたるは巨勢武内宿禰、九郎判官源義經、平良門、空海上人、松木春彦、安倍晴明なり此氣は山人の界にては氣線と稱し支那の仙界にては天足と稱してこは容易に凡夫のうかゝひがたきものなり此氣晝夜によりて其色異り盛運の氣は大にして金色の點交り盛烈にして棟上より起りて漸々に大なり衰運の氣は黑點と水氣の如くなる氣と打交り下大にして漸々空に及ぶに隨ひて小く其末遂に消滅して見えず此氣を窺ふは日の出づる前と日の暮るゝ時曇りたる日又月夜などは上の上なり其見る法を以て行ふ時は見ゆるもの

なり之を空より見る時は網の目を見るが如し盛運の氣登りたる家には空より見る時は三つの玉の如くして美しき瑞氣と見え衰運の氣の上末には消えかゝりたる所に裸體にて黄褌をして手足爪長く髪茶色なる餓鬼の形なるものゝいくらともなく跳りたる形の見ゆるもあり黑色の形にて眼水色にて光るものゝ采配を持ちて打振る狀の見ゆるもありて玉の見ゆる家には思はずして益々富榮となり異形のものゝ見ゆる家には貧にして大損を來すばかりにして夫婦爭論口舌止む時もなくつひに産を失ふもあり骨肉散々に離別するもあり此氣を知らぬ輩は家の軒を見るべし家の軒のあれてつやなきは衰運にして家内暗く汚衣汚物家内に散亂れて自然と家人惰怠の心起り家事多く跪き病人絶えず又家軒美しくして光潤あり家内明く清淨にして家人病なきは之れ盛運の兆と知るべし

一神仙より罰を受くるに至りては二夜も必ず血の雨の降りて身にかゝる夢を見るなり此時は第一慢心を慎み酒を一盞も飲むべからずよく言語を少くして我身を清淨にし怠惰の心起らんとするを一命に替へても勤めて怠らず神祇に謝罪を祈りて祭典を厚く行ふべし如此せざれば醉に乘じて人に無禮をし容易ならざる失言を吐き虚言を誠らしく語りて忽ち現はれ善人を罵り人の非をあばき終に如何ともすべからざる大事を仕出し財産を削り身を誤り己を悔い俄に天に祈れども及びがたきに至るもし此夢を見たる者は右の祭典謹慎の事を怠るべからずこれ神祇より罰を蒙るの數多ある中の一つなり

一肉肌仙の精藥とて飲むものあり之は紫柑とジャボンとの間の蜜柑にて大橙蜜柑と云て皮の厚き蜜柑にて通常のとう蜜柑よりは大なり此核を十二三口中に入れて津唾にて錬る事暫時にして其津液のねばり苦くなりたるを度として核を吐き出し其津液を清水にて飲み送るなり之を益精易血の法と云ふなり此法は川丹先生及び玄角先生にも聞き且つ其行ひを見し故に書き置きつ

一天狗界にて重寶と呼び大切にするものを見し事あり鬼の顔の如き形の兜一つ鬼の面の形なる鏑の付きたる矢三本鬼の面の形なる鍔の付きたる太刀十一口なり此物は皆上代の器と云へり又神仙界にては神代の寶器と呼びたる物は其數幾千と云ふを知らず其中にて鏡三十二面劍二十四口穴明大玉二百六十三丸木弓六張天變先後大文一軸等は殊にすぐれたる寶器なり

一天狗界の山人の罪科を受けて狗賓界に墮ちたるものゝト筮を行ふ狀を見し事あり其狀は四角なる水晶四つを左の手に二つ右の手に二つを握り空を向ひて何か唱へ

て握りたる水晶を坐上に投ずるなり一の水晶の四面には天照皇大神と彫付け一つには素盞嗚命と彫付け一つには思兼神と彫付け一つには神武天皇と彫付けたり此四石の居方(スヘリカタ)によりて吉凶を卜するなり

一佛魔といへる物あり夜中に種々の異形を現ずるが中に多くは金色にて長高く體大きく左右に金色の童子長卑きが二人添ひたり夜中に此佛魔に行きあふ時は忽ちすくみ手足自由ならず聲を出さんとするにも口つくみて言語出でず夢中に物におそはれたるが如く此もの消え失せて後は熱病を發する事あり其病は猛烈の瘧疾に似たり此病を癒すには桃核を細末として溫湯にて嚥下し體をば雞冠石の粉を以て塗るべし如此すれば其病も速かに癒ゆるなり又厠を不潔にする時は此佛魔の立寄ることあり故に厠は清潔にして硝子鏡を常に掛け置くべし厠の中には金の鏡は用に立ちがたし如此すれば厠中に此佛魔の入る事なし此佛魔に出會するは多くは深夜に厠に行きがけにあふものなり

一明治元年の頃川丹先生に伴はれて空中を飛行するの砌り雲霧の中を凌ぎ行きけるが東南の方より螺貝の音高く響き來るあり川丹先生の云ふ饒速日命五十猛命の御通りなりとて頭を下げて拜しける閒に螺貝の音近くなりしが雲霧忽ち晴れたるに金光のきら〳〵として乾の方に鳴り行きたり川丹先生の云ふ饒速日命と五十猛神は幽冥界にて螺を吹き給ふが御職なり此神の螺貝の音を聞く時は其後とても幽府の神樂の音も深更に及びては遠音に聞かるゝなりと云へり偖彼の金光の通りし後は又雲霧となりたり川丹先生の云ふ螺は雲を拂ひ神言を遠きに告ぐる用なりとて飛行する程に又乾の方より以前の如く金光の中に螺貝の音しけるが又も雲霧忽ち晴れ金光の後に螺貝の鰭のあるもの數十連立ちて從ひ飛び行きたり

一川丹先生は其根元は神界にて水位と同官同位なりしが水位冥官の掟を誤り此界を退けられし事久しきが閒に川丹先生は位階も進み退妖館中の員列三十六等紫上の中位といへるに至りて大靈壽眞人よりは二十七階ほどの上位にて其上に智識明達にして此界にても名譽ある川丹先生なれば再び此界に出入の赦を受けてよりは師仙と仰ぎ敬ふなり水位の根元神界に出入せしは十歳の頃より少童君に伴はれしが始也

一諸越(モロコシ)の神仙界へ玄角眞人に伴はれ行きたる時に五岳眞形圖第二變圖第三變圖流門眞形圖神虎十二符神洲眞形圖など云ふを始め諸圖諸符も多く寫し歸りたる事もある中に天運八會十二變圖といへるものは此界にて其題名を聞きしのみにて此界の

寶物中の第一なりとて其圖は請ひけれども見せ給はず依て玄角眞人に問へば其題名をさへ下位の神仙等には知るものなし又中位のも題名は知るもあれど其眞形は知らざるなり余も未だ其圖は見ず其圖の譯は略々聞及びたれど委しくは知らずとて其事止みぬ日を經て後に川丹先生に召されたりし際に川丹先生に尋ぬれば其圖は宇内の寶軸にて支那のは寫せし圖なり元書は此神界の紫蘭臺に藏りたり容易に見る事は許さゞるなり其趣を語るさへ神祇の咎めありとて赦したまはざるなり又川丹先生の云ふ支那神仙界にて五岳眞形圖一軸は元物にて外のは模寫せしものなりと申し給へり

一現世にて神等に伺ひ奉りたき事どもありて其事を心中に思ひ幽界に入りて見れば其伺ふ事をも打忘れ又此界に歸りては忽ち思ひ出づるものなりされば此度は忘れじとて紙に書き付けて彼界に入る時は其書付を懷中にしながら忘れ或は又書付に不圖心付きて尋ぬるに其時ばかりは能く覺え居れども歸りて見れば夢の如くに恍惚として證なきが如くして忘れ或は現世に譯しがたきも彼界に入りては自然に解する事も多くあり人間に洩し難き事件に限り必ず忘るゝなり又人間に洩しても咎めなき事も日を經る間に忘るゝなり

一現界にて常に行き通ふ山も靈魂の脱して行く時は一の仙界と見え又肉體にて行く時は仙界のありとしも思はれず三間ばかりの山の頂も靈魂のみにて行きたる時は百里もあるやうに思はれ小き祠も數百疊の宮殿とも思はれ狐狸にばかされたる思ひをする事もあり

一或年川丹先生に伴はれて土佐國〇〇郡〇〇郷なる〇〇〇山と云ふに至りけるに白髪白鬚の老翁大なる帳面を携へて笹の上に坐したるに川丹先生九拜し終り詞をも出さず遙傍に坐し居たるに大蛇に乘りたる神御年頃二十五六歳ばかりなるが東方より來り給ひて大山祇神の使者なりと大音に述べ給ふがいなや乘り給ひし大蛇は消えたり又東方より小き蛇に乘り色黑き神來り給ひて建御名方神の御使なりと申し給ふ其御聲とゝもに小蛇は消滅したり又東方より白狐に乘りたる神の年頃八十歳ばかりの老翁來りて宇賀神の使者なりと申せば狐の形は忽ち消えたり又東の方より白兎に乘りたる神來り給ひて氷川の神三柱の使者なりとのたまへば白兎は忽ち消え失せたり又西方より鳩に乘りたる神來り給ひ八幡二神の使者なりと申せば鳩は消えたり乾の方より五色の小蛇に乘りたる神來り給ひて大國主神の使者なりと申せば小蛇は消えたり又北の方より猿に乘りたる神來り給ひて日枝三神の御使

なりとのべ給ふがいなや猿は消え失せたり此外に物に乗りたる神等數多來り給へども乘物及び神名も忘れたり諸の神等大帳面を携へ給ふ老翁の神に拜禮をなして各々又小き帳面を出して翁神に捧げ給へば大帳と引きくらべて小首を傾け或はうなづき大帳に何か書入れ給ふ狀の見えけるが翁神暫時にして諸神の御使者大義大義と大音に演べ給ひ且つ川丹大靈普全壽眞人冥鑑の代理御大義と申し給へば翁忽ち消えて否や音樂の音しけり其時諸神は同音にエイと云ふ聲を發すれば乘り給ひしもの皆現はれてそれに乘り一禮をして立還り給ふ之には大切なる譯ある故に洩しつ然るに此時は大陰曆十二月晦日なり

一西洋にも一の幽界あり北方より南の方を向ひて入る家は數千萬凸凹として屋根は毎く平かなり高きは十五丈ばかりあり卑きは五丈ばかりにして皆白色なり家中には物を賣買する狀見えて種々の物品を陳列したりその美なる事言語の盡す所にあらず此商家とおぼしき所を經て東に曲折して歩すれば大川あり北より南に流れ其水色碧にして舟渡する者數名あり皆女人なり其舟に乘りて東に渡れば大なる川原あり漸々其所を經れば杉の木に似たる木繁茂して南北は目の及ばぬ迄に生ひ連りたる林ありこゝを過ぐれば數萬の家あり或は丸く高きもあり又四角にして上小く高きもあり又屋根平かなるも山形なるも神輿に似たるもあり其家は三階或は五階もありて此界を「ブラテリー」と呼ぶ支那仙境より此界をさして竺半界と呼ぶなり此界は支那仙界よりは五百倍も大なり家内の造り方に至りては目を驚かすばかり種々奇妙に造り構へたり又橋梁などに至りても奇妙に工みて架したり此域の中央と見ゆる所に大山の如き家あり其家に限りて屋根の中央より高き黑色なる大柱ありて空に聳えたり家の色は黑白にして緣をとりたり人物の狀は種々にて一樣ならず女人の髪の結び樣且つ腰に纏ひたる物に至るまで種々樣々なり男は多くは黑色の服を衣たれども其服の仕立樣も少々違ひたり其中に今現に見ゆる西洋人の如くなるが尤も多し偖此山の如き大なる家は此界を主掌する宮殿と見えたり此宮殿の四方外に此宮殿よりは大名に小き家あり然るに中央の大宮は「ゲートルサンダマリ」といへる神の坐して天神の命令によりて素盞嗚尊と八意思兼神の主掌し給ふ宮殿なり東方宮には「ニムロト」「セイリウス」「アレキサンデル」「カラサル」などと云へる神のまし南方の宮は「アダン」「イブ」西の宮は「諾巴」北方の宮は「サルダナハリユス」など云へる神の坐し四方宮の中の屬神には豪傑の神靈及び智識發達の神靈付添ひたりされど大事を議するに當りては「ゲートル神」諸神の優れた

るを率ゐて神集岳界中の大永宮へ參觀し給ふなり然るに此界の乾の方に當りて「アンミ」と云ふ山添の所に宮あり「キリスト」の住む所なり今天竺の佛界にては此アンミ宮を「ビラウント」と呼ぶなり此宮のある所は區域立ちて別界に似たれども「ゲートルサンダマリ神」より指揮を受くるなり然るに此界一圓は皆死人の靈なるが後に靈の肉體を作りたるが七人ありと云ふ玄角先生の伴によりて此界を一見せしことのあらましを記す「ゲートル神」は思兼神の事なり「サンダマリ神」は素盞嗚尊なりされど常には素盞嗚尊は居坐さぬよしなり

一地上に幽界は其數も多きが中に一小社といへども幽界を多くは構へたり宮の幽界は出雲の大社などは幽界に入りて見る時は一つの大幽宮と見ゆ又罰を申し付くるの宮は此宮にて賞を行ひ給ふは伊勢の神宮なり又罪ある靈魂を罰し給ふ所は數々ある中にて地獄の刑に行ふ所は諸國の噴火山なり罪の最大なるは神集岳中の退妖官に出してその罰を受けしむるなり其中には靈魂を消さるゝも月の國へ追はるゝも地上に付きたる下等の幽冥へ下さるゝもあり又善行ありし人の靈魂は日界に上るもありと川丹先生に聞きしかど月界に入り又日界に入りたる靈魂を見たることは稀なり多くは靈魂は地に付きたる幽冥界に止まるなり然るに萬の幽冥界の靈魂

も神集岳萬靈神岳に往來する事もあり然るに幽界の大都は第一紫微宮第二日界第三神集岳第四萬靈神岳なりされども常に幽政を行ふ法式を定むる所は神集岳なり

一一月一日には北辰星中の紫蘭大樞宮號眞光遊門の前庭に萬の界の神々の參り揃ひて朝するなり此神界は常に日月の光りは見えず電光に同じき光り上宮より發して常にも晴れたる月夜の如く此界に至る迄の間は氷中を通るよりも寒く界に入りたる時には三月頃の氣候なり偖參朝の神等は此光遊門の内なる鷲磐場といふに列坐して慇懃に參朝の式を行ふ上宮には扉開きたれど遙かにして神體は見えず只猛烈なる電光の三つキラ〳〵と光りありて四方に發微するを拜するのみなり三つの光りの中にて水色にして五色を含みたる光りを中央として左に火色の光りあり右なるは白光を放ちたり此三つの光り千里の外に及ぶ偖參朝の神等には風神、五行神、豐宇氣毘賣神、大山積神、須佐之男神、建御雷神、大綿積神、天之冬衣神、言代主神、賀夜奈流美神、少毘古那神、天忍日命、天手力雄命、天之宇受女命、天兒屋根命、天角凝魂命、大禍津日神等を始め奉りて諸の界に優れたる神幾萬を以て數へ奉る此參朝は毎年一月一日なり此參朝の事を西洋の幽冥界にて「ヤニユアレー・ロウマーンド・エーンダフ・ノールドボール・コーニングスボイス・チ

ツフキリムメンゾン」といふ之は何と云ふ事なるか知らず又此名に異なりたるもあれど忘れたり

一日月の界には入り難しされど近くより見たりし事あり川丹先生に伴はれて日界に近づくに暖冷の處を幾重ともなく過ぎ行く程に火氣身を燒くが如き處あり此處を過ぐる事暫くにして日界を下に見るなりそれより下るに四五月頃の氣ある所あり其處を過ぐれば日界は黄色に見えて三ケ所噴火山と見ゆる所あり其傍に黑色なる三ケ所あり其四方に城闕の如くなるもの數十あり委しくは分らず又或日伴はれて月界に近づくに暖氣なる處を過ぐれば又寒氣甚しき處あり此所を又過ぎて遙かに月界を望めば白き山に似たるもの數々あり其中には黑色のもの打交りて見え且つ瀧の如くなるものゝ大小ともに四つ光りを發して四方に散亂し水玉の如きもの數數飛び上りたる如く見え能く〳〵見れば人家の如くなる物數多見えたり先生の云ふ此所より能く見て覺え置くべし常には來り見る事難し天狗界のものは此處迄近くは來る事なき故に種々見違へるなりと宣ひける

一明治四年十二月晦日夜明方少童君に伴はれて北氷洋を過ぎたる時に氷海を過ぐれば氷山ありその北岸より幾千仞を知らず大瀧數ケ所に下り其光り月の如く空に映じ寒氣尤も強く此所を過ぎ行くに西南と思ふ方より音樂の音して東北に過ぐるを見る女神に隨從の神千餘許りも付きたり少童君と出會し給ひて互に慇懃に禮を述べ給ひて別れ給ふ少童君に伺ひければ須勢理姫神なりと宣ひけり此神御年は三十歳許りに見え給ひて御面美はしくましく〳〵て御頤は少し長き方に見奉りき又行く程に暖氣の所にかゝりて下に黄黑き色を見て又寒き所を經て又暖所にかゝり海面を下に見て行くまに〳〵やゝ〳〵下りて一の島に着きければこゝにて休息す少童君宣ひけるは地球を一周廻したり此處は琉球の屬島なりと宣ひ暫くして此處を立ち土佐國にかへるかくて此國近きあたりの雲路にて一神に出會ひ給ふに又禮して別れ給ふ少童君に伺ひ奉れば此神は建依別神にて御名を天之八現津彦奇根命なりと申し給へりさてそれより我家に送り給ひしは一月一日の黎明なり

一何れの界に至りても其界に入る時と其界を出る時ばかりは飛行は致せども已に其界に入りては其界の上を飛行する事を許さぬが諸の界の掟則にて界に入れば尊き神等と雖も歩行し給ふなり川丹先生の用向ありて一つの界に趣き給ふ時に伴はれて行きたる事あり其界の名は今は忘れたり大川の東方に流れ長堤のある處に始めて降りたるに北方は大川南方は堤なり此堤を歩する事二里許りにして藁葺の人家

ある所に出たり男女ともに皆面貌は美麗なれども現界にて見る非人乞食の樣をして腰には小き緒を結び多く股迄露はしたり此處一つの區域をなす此處を東に過ぐる事一里ばかりにして黑色の家ありて商家の狀をなす又此處を過ぐる事八丁許りにして山あり宮殿並び立ちたり支那服に似たる仕立にて黑衣を着し男女共に太刀を佩きたり此山の入口に黑き大門あり內に入れば左右に大なる家あり此處を一丁ばかり右の方と思はしき所に黑き塀十二重高く聳えたり私に內を窺ふに黑き大なる柱を數十組上げたり此處は此界の刑法場と云ふ此處を過ぐれば南は大山東に連り北は大川を隔て砂漠を見る山麓に添ひ東に行く事二十丁許りにして北の川岸に折曲すれば渡舟數十あり舟の舳に四歲ばかりの童子を載せて居ゐたり此川渡大なる浪逆立ち大渦の卷きたる處數を知らず川丹先生云ふ汝は此處の舟に乘る事勿れ最危き所なれば此處を一丁許り東に行く時は十丁位なる小山あり此山を半を北に向ひ下れば川渡に出るなり又小山に至る際に道二つあり左の道を行く時は大なる家あり其家より役員出で來れば事六つかし依て窃に右の道より山に登るべしと宣ひて先生は舟に乘り別れて行く程に道をとり違へて件の大なる家の門に行き當れり此門前をさへぎり山麓にかゝりけるに後より棒を持ちたる人二十人ばかり追ひ來りけるに一生懸命足に任せて行く程に此山は巖岨にして大樹茂り種々の獸類大なるは牛の如く小なるは兎の如くなるもの丶數十往來して其恐しき云はん方なし山半に至りて日已に暮方になり追ひ來る人も近くなり此處より北に下れば卽ち川渡に出たり川上には筏を組みて水面穩なり此筏を踏みて渡る事六丁ばかりにして大なる川原に出で後を見れば彼の追ひ來る人は何處へ行きたるか見えず又川丹先生も來り給はず此川原を北に向ひて行くに小高き所に松の林あり此處を過ぐれば又人家數十あり其人家の並びたる中には學校に似たる所ありて童子共數多物學ぶ狀の見えたり此處を又北に過ぐるに川原にして墓所とおぼしき物の累々として連りたるが幾千と云ふを知らず其處にて日已に沒したり又此處を過ぎて行く程に向ふより六人現世の巡査の如きが來りて我を捕縛せんとするにぞいと心細くなりて大音を出して川丹先生と呼ばゝりたるに六人の者少しためらふ狀の見えけるに又川丹先生と呼ばゝりければ六人の者川丹先生といふは神集岳中の尊官なりと云ひて六人咄しけるに西の方より數十の燈火の見えけるに追々に近くなりて川丹先生五十人許りの者を率ゐ給ひて來り給ふに六人の者は地上に平伏したり此時蘇りたる心地をぞなしける川丹先生の云ふ此界の主官に要用を談ずるほどに隙どりたり

と宣ひければ六人の者は跡しさりして逃げんとするに川丹先生の云ふ此者を一人此界に放ちたりしは我が失策なり廻察員大義なりと宣へば六人の者は大に御無禮を仕りたりとて其所を退きたるに又五十人の者に向ひ送員大義と申し給へば西の方へ皆々歸りたり之より此の所を立ちて其夜半ごろに送り還し給ふ

一神集岳退妖官の尊き御役目をしたる五氣鬱隆進退吏官行方位刑上品磐性君の余に示して云ふ現世にては天皇は諸社の神よりは尊し然りとて官人等の　天皇の命を僞り神社の神位を我心任せにして神の尊卑を談じ貴神を墮して賤神に增位する等は幽冥界に入りては其罪重し親に不敬をする等の罪は之より輕きと又重きとの二つありされど　天皇を輕蔑し高官として命令を僞り作りたるは神の赦さゞる所にして其罪科尤も重し○○○○○○　○○○○○○○○○○○○○　天照皇大神の御祭には何れの界に入り給ひしも打連れて參觀し給ふなり死して後は神集岳ぞ大都にはありけるされば現世にて天皇に仕ふる如く正直に仕へ奉るべし又現世天皇の御爲次で人民の爲には心をも盡すべしと常に宣給ひき

一或年の九月頃に日暮を待ちて脫魂法を行ひ居たるに常に座敷の四隅に掛けたる蚊帳の釣緒の風なくして動き拍子とりをして音したり行を止めて見居たるに座敷の

中央に小き土俵出現したり東南の隅と西北の隅とへ小き相撲取數々現はれたり小くはあれど皆肌の肥えて現に今の鬭取の如く其粧も異なる事なし暫くして一人の行司黑き上下を着して土俵に進み出て東の方は龍田川西の方は凱陣と名のりたりしに左右より二人の相撲とり土俵に上り常の如くして立上りて組合ひたるに西の方は東の方に足手斧を打たれて凱陣負けとなる行司の采配東の方に上る次に音羽川と名乘りて西の方より出で組合ひたるに胸やぐらにて西の方は土俵の際に仰向になりてトンと云ふ音して倒る東の方勝と采配上るさて面白く見居たるにいつしか時移りて日暮れたり又西方男山と名乘るに常の如く一人の相撲取力ありげに見ゆるが土俵に上る此時坐中に光り物出で忽ちに土俵も相撲取も一度に消えたり庭の方にて「ハア」と云ふ聲して一枚の障子火炎となりて黑燒になれり不圖心付き座敷を見れば川丹先生なり先刻より來りて種々の狀を現はせしは妖魔の仕業にて如此あらんと思ひて參りしなり○○○と云ふ文字を書して門に張るべしかくすれば以後來る事なし然るに今の妖魔は東隣の家にゆきたりと宣ひて川丹先生は歸り給ふに暫くして東隣に「ワア」と呼ぶ聲して大に騷ぎ立つ物音聞え又暫くして女の泣き叫ぶ聲したりそれより寢て翌日隣家より我を呼びに來りけるに行き見れ

ば其家の主は昨夜燈火の下にて孫子童觀抄を讀み居たるに障子の外にて火の燃ゆるが如く見えければ障子を明けて眺め居たるに炎は見えず前庭の垣を押別け髪の亂れたる色青き大男が槍を小脇に挾み來りしと見えて消え失せたるに俄に大熱を發して閨に入りたり夜も更けゝれば女等も皆閨に入るに黑き坊主の長高きが眼を怒らして座中を徘徊し衾の中へ毛のある手を度々差込みたるに鷄鳴の頃髪長く長高きが長上下を着して來る其時は太刀にて切らんとすれど手足しびれて動く能はず今朝に至る迄如此事ありて一睡もせざるなり之を厭除く祈禱を執行ひくれよと依賴せらるゝに余は今日は要用ありて他出すれば歸り次第に執行仕らんとて歸り朝飯して他出し其日の夕方に歸りけるに東隣には日中も種々の變ありしと云ふにいなや行きて問ふに貴殿の歸りの遲き故に市街より陰陽師を呼び祈禱を致したるに陰陽師の持ちたる幣串の炎となりて燒け失せ或は盥に衣服を水に漬けたるが火燃え上り竈の前には堅き人糞を串刺にして立て列ね或は床下に小兒の泣く聲して陰陽師も手を置きて退きたるに夜明雞助といふ卜筮者を雇ひ來りて又祈禱を行ふに雷木(ハリ)の先より火燃え或は祈禱札の祈念中に燒け失せて夜明雞助も只今歸りたる處なりと云ふ不圖思ひ出て件の〇〇〇〇と云ふ文字を數枚書して柱の每々に張りて之にて止まるべし明日を待ちて試み給へとて歸りぬさて其翌日に至れども何の變りたる事もなく妖魔の害も止みて主人の熱病も全快に趣きたり

一先年阿波國勝浦郡金磯新田村多田氏の招待によりて當家に滯泊の砌り同村某の子息十八九歳なるが狂氣を發して種々樣々の術を施せども全快せずとて余に此狂氣の鎭まりて平癒すべき祈禱を致し呉れよといふに辭退すれども聞入るゝ樣もなくて遂に招きに應じて或日の夕方に彼處に至りけるに其夜は小松島と云へる所の神宮分教會所の世話方をする者等數人よりて酒宴いたし大に賑ひて深更になりければ明日は祈禱執行の有樣を拜見に來らんとて皆一禮をなして我家に歸る折しも六月の事なれば蚊帳を張りて閨に入り一睡して目覺めたるに身體寒くなりて衾を卷きて居たるが東北の蚊帳の隅にて靑火ボロ〳〵と燃え漸々に大きくなるに從ひ人の形となりたりよく見れば年頃三十七八歳許りの男白無垢の上に麻上下を着たるが怒れる體にて余を見つめて云ひ出けるは足下は幽冥に通達したる人なり故に我形を現はして積年の鬱憤を告ぐるなり我此國の家中にありて中郎の職を致したりし者なるが今此家の妻になりたる者は其根元は吾妾なりき我存生中に種々云ひかはしたる事のあるを或日我入湯したる時汚垢を流し呉れんとて手拭を持來り後に

廻りて手拭より短刀を出して吾咽喉に突き立てければ我忽ち卽死を遂げしなり其死したる有狀は我と我手にて自害したる有狀に見せて其罪を免れ一年二年行く程に此家の主と密通し我が儲へ置けりし金錢を取出して此家の妻となれり其惡さ堪へ難く思ひいつかは此恨を晴らさんものと已に此家の一子をば狂亂人となし其胤を斷ちて遂には惡女を取殺さんと思ひ積りて今日に至れり今迄も度々出現したれども狐狸の如く云ひなすもあり或は恐れて逃げ去る者ありて其意を達せず今夜足下に告ぐる事一として僞にあらず最早夜も明けなば此家の毒妻に問ひ糺し給へ今一番に狂亂者を締め殺して我來りたる證とせんと云ふにぞ如何にして足下の意に適ふや此家の女に新宮を建てさせ生涯日々に恐入致させ祭典怠らずして足下を叮嚀に拜禮致させ改心の有狀を見給はんには恨怒の心も鎭まり給ふべし我に此中取持たし給へと吳々もいひけれども如何に叮嚀反覆を盡し給ひて惡女のいかに恐入り改心すとも此恨は去りがたし足下此國にある中は我思ふに狂亂者を殺しなば足下の名譽に關係すべし又足下に對しては道たち難し此國を去り給はゞ其後には彼を殺すべしイザサラバと云ふ聲と共に炎となりて飛び去りたり漸々夜明ければ狂亂者物を吐く音しけるに家內皆起きて朝飯の用意をして我も朝飯を食し竟りけれ

ば狂亂者の今朝かゝるものを吐き出したりとて金盥に痰汁の二合位入りたるを見せたりそれより夜中の委細を竊に語りければ夫婦共に打驚き泣き悲しめどもせん方なければ彼の怨靈を慰むるの祈禱を執行ひて其日の午後四時頃に家を立出で多田氏の宅に歸りさて日を經て其國を發足して歸村し二十日の後に多田氏より書狀來る其文中に件の狂亂者は「ワア」と叫びて五日以前に死したりとありて彼の靈魂の仕業なる事を思ひ出したり怨魂の姓名も夫婦の姓名も明白なれどもよろしからぬ故に書き洩しつ

一或時川丹先生に諸國名山を巡見せん事を願ひたりしに六月六日より九日まで四日の閒は休業日なり故に伴ひて諸國の名山を見物いたさすべしと宣ひけるに其日を待ちて六月七日の夜明先生に伴はれて土佐國を立ち大空に上りて西方に斜めに下りて薩摩國海門岳並に紫尾山を始めとして日向國高千穗、肥後國阿蘇岳、肥前國中岡山、豐前國彥山、豐後國羽根山、周防國久米大山、安藝國久羽山、伯耆國大山、隱岐國大寺山、丹後國大江山、美濃國丹生の大山、飛彈國硫黃岳、越中國立山、能登國山伏山、信濃國御岳、三河國連谷山、遠江國秋葉山、駿河國不二山、甲斐國八岳、天目山、上野國吾妻山、足尾山、日光山、岩代國鬼面山、常陸國筑

波山、磐城國守山、湯岳、羽前國藏王岳、羽後國駒ケ岳、陸中國南昌山、陸奥國岩城山、龍飛岬にて休息す此外七十二山あれども常に參りたれば此度は洩しつ此所を立ちて渡島黑木岳、膽振國札幌岳、石狩國空知岳、天鹽國ケネフト山、北見國エカリ山、釧路國足寄山、根室國茶々ケ嶽、此處を立ちて擇捉島モヨロケ岳にて休息し又此處を立ちて樺太國ルウタカ岳、ニイシヤチ岳、キトウシ岳にて日已に暮れたり此處にて田螺と干飯の粉と水にひたして硝子に似たる紙に包み土を掘り埋めて其上にて火を燒き暫くして取出して我のみ食したり川丹先生は食せず側に火を燒きて一夜臥したり其翌朝日出前に此所を立ちて大空に上ること遙かにして斜めに西の方に下りて支那國の徐州泰山に着き此所を立ちて楊州の鍾山、會稽山、豫州嵩山、熊耳山、荆州の衡山、梁州の峨眉山、岷山、遙かに西に過ぎて大崑崙山、岡底斯山、此處より東と思ふ方に向ひて雍州の積石山にて日暮れたり翌朝崆峒山、終南山、華山、大龍山を見物して冀州に入りて姑射山、大岳、恒山を見て朝鮮國に入り三面山より立ちて大空に上り又下りて日本の地方に渡り長州の上を斜めに通りて速吸門を下に見て伊豫國石鐵山に休息して其日の午後九時頃に我が住居せる村の中にある筆山の頂迄送り歸し給ふ右に記せる外に數々見物せし山あれども忘れたり樺太國を立ちて徐州へ通りし時に海中にて大渦卷くを下に見て川丹先生に尋ね奉れば淮南海なりと宣へり速吸門の渦よりは餘程大なり偖右の諸山の中にて大崑崙山、泰山の二山には心を止めて見物せし故に山形及び景色なども今にあり〳〵と覺えたり偖伴はれて國々を見巡りたる時は川丹先生三度水を呑み給ふのみにて食事は致されざりしなり我は三度食事を致したる樣に覺ゆれど二度は何れの山にて食せしか忘れたり又高千穗岳にて川丹先生の云ふ此池は雄黄水にして之を汲み取る時は鼠色となりて堅くなるなりそれを粉にして現世人の痺癖に付ける時は忽ち癒ゆべしこれ無類の奇藥なりと宣ひけり

一我同村に岩藏とて漁業を以て家業とする男あり嘉永元年大江戸にありて叡山の二本杉を信仰するよりして年三十六歳にて大山僧正に伴はれて萬國を巡り度々伴はれ見馴れぬ所を見し嬉しさに同僚の者に委細を語りて俄に狂亂を發して江戸より追ひ下され同村に歸りて後は狂氣も治まりて常人の如くなりたるに其後も度々異境に入りし由聞えければ我父常磐が安政五年七月にかの岩藏を呼びて異境の事を書き記せる中に杉山僧正に伴はれて諸山を見巡る條に相州浦賀〳〵港の上を通り伊勢兩宮へ參拜しそれより伯耆の大山へ行く此大山は八丁許りの山にて初めの二丁

位の處に清海ケ瀧あり此時僧正瀧へ聲をかけ此度大山本山を相勤むる者召連れ參拜仕ると申されければ上の瀧にて宜敷と答へありそれより又二丁許りの處に中の寺と申すあり此處に地獄の權衡ありて人の善惡を知り給ふ私此衡に掛けられたるに僧正申されけるは此者は獸を殺せしこと顯はるれど其獸の仕業惡しかりし故に罪咎は少し後刻此者を伴ひ歸る雲路にて淺間山の烟にうたせて罪を清むべしと宣ふ此獸のことは私魚を料理せる時に猫來りて其魚を口にくはへ走らんとするに庖丁を振り上げておどし候處はからず柄がぬけて猫の　所に立ちて死したりし事あり之は若年のことなりさて此上には尊き所あれば祓ひをして參るべしと申されけるに傍の人私の後より麻を以て祓ひ清め給へりそれより半丁許りにして奥院といふあり此所に社あり其社はもと伊弉諾尊の天降り給ひし所なりと申されて其所に行きければ小き穴あり内に入れば踏石あり向の左に瀧あり其下は淵にて水面は紺青色なり落つる水は逆まに飛び上り通常人にては容易に渡る事難し故に翼ある人に負はれ向に渡りければ左の方は青色の石にて菊の彫物あり花は朱にて塗り葉は綠青にてぬれり此處より向は上下左右共に水晶の如くして八疊敷ばかりの平なる石あり其光り美はしく其奥の上の方に高さ一丈餘りの丸き穴あり此に六尺許りの石にて作れる神體あり之は伊弉諾尊の御形と申されたり之より上は穴明き通りて大空見え奇妙なり此處は山人どもの深く信仰し給ふ所にして此山の名を菊山と申せり又僧正申されけるは花は吉野の櫻といへども此菊山が花の本ぞ忘る事勿れ云云岩藏がいへるは伯耆大山の幽冥界と日向高千穗山の西南にある幽冥界とを混合して語れる事にて伯耆の大山には人閒も容易に通り難き瀧はあれども神體などの石はなし高千穗山の幽界には穴あり四方は岩藏が云へる如く美しき伊弉諾尊の神像たる天然物と見えて長さ一尺ばかりがあれど瀧のうつりによりては長さ一丈にも二丈にも見ゆるなり前の疊岩は三尺方面にして八疊敷程はあらず岩藏は魂にて見しか皆大きく見えたり此三尺ばかりなる石は綠色にして所々に十六方面の白色にて燈火の如く光る石を含蓄し其石の中には日光と瀧水との遇合なるか虹蜺の如くに光り見ゆるもあり此伊弉諾尊の尊像石は其色は茶色にして少し赤色を帶びたり然るに此幽界は常人の至る事を許さぬ所にして偶に至る人ある時は近年頃は再び歸さぬ所なりき明治五年の頃よりは西洋人も多く來るに隨ひて異人に伴はれける人すら此所に行くは止められけり

一幽冥界の事を記するに當りては何れの界に入りても返るや否や近年は筆記すれど

も大事なるは書き落せる事あり其大事のことも書きたる様に思へども後日見れば大事件は如何なる事か書き落して文句のつゞかぬも多かるを心つきては書入もせんと思ふにこれさへ只思ふのみにてあるは心地悪しくなり頭痛などして書入るゝ事も亦うるさくなり明日こそ書入もいたさめと思ひつゝ其日になれば又前日の如くかくして一日二日延び行く隨に夢の如くなりもて行きて終に忘れ果つるなり又其忘るゝことを知りては幽冥界より歸りたる時に早く大事なる事も書きつけて漏落ちたる處はなきかと數十遍も繰返して讀み見るに文句も聞ゆるを翌朝取出して見れば文句も散亂して木に竹をつぎたる如く我が筆記せし物ながら合點の行かぬ様になりて再び書せんにも大に勞の行くやうに思ひ怠惰の心俄に起りていかにしても大事をば書き止むる事かたしこは幽冥中にゆるさぬ理りのあるなるべし

一大山僧正杉山僧正の大空より志したる山に下るには雲霧にて其山の見えぬ時は空より九字を切り次に指にて○＋□を書く其書く形は卐如此にして○○と三唱して十文字の中と思ふ所を口にて吹き次に羽團扇を左右に振りて兩手に持ちて頭上に上げて横にして吹きたる所と思ふ所におろすなりかくすれば忽ち雲霧はれ山々の峯も見ゆるなり

一杉山僧正が川丹先生の命を受けて東京の平川町と云ふ所を焼きたる事あり之には故あることなるが其焼く様は種々あつて血を落すも羽根を落すもある中に空より大指の爪先より血を出して火となし落しけるに其下俄に大火事となりたるに天狗等數々飛び來りて鳶に化して火にあたりし事あり奇妙なる事なり

一狗賓界の者の人形に化けて諸社の札配りと僞りて板木にて淺閑大神守護、太宰府天滿宮守護、鹿島大神祈禱守護など云ふ札を摺り之を配りて金錢を取り梅干、豆腐、白紙、庖丁の類を第一として種々買求めて住所に歸るよし聞きたるを明治八年十月頃に鹿島大神靈璽と書きたる札二枚を商家にて見たるに此札は誰より授かりたるやと問へば此札は鹿島神宮の社人とて先刻配り來りしを受けたるなりと云ふ其字體常と異なれば不圖思ひ出して彼の狗賓の仕業にはあらざるかと疑念起りければ一枚所望して持歸りて開き見るに短册ばかりに切りたる紙を墨にて色々に塗りて何を書しありとも知られず日を經て杉山僧正に問へば登喜魂經津ノ劒神矢大臣弓主神と書きたるを塗りたるなるべし之は武甕槌神と天忍日命の二神なり狗賓界より出たる札は皆中の字を塗りたるなりといへり又鬼面に矢を通したる物にも矢大臣と名づけたる物もあるなり

一杉山僧正、高山僧正、大山僧正などの山人に伴はれて諸國の見馴れぬ所を見物するは殊の外面白く行く時は耳に風當りて切るゝ様に思はるれど蝙蝠の皮にて度々湯を付けて押す時は其痛みも止まるなり諸の幽界にも入りて心に發明する事も數多あれど山人天狗界には入らぬが眞の人にてかゝる界に入る時は自由自在なる事はあれど其自由自在に倍したる苦しき行ひあるなり其行は見る度毎に身の毛もよだつなり此界に入るやいなや僧正ほどの位にならばよろしきことなれど常人は容易になる事かたし故に其從者となりて苦みを受けんよりは人間の樂みが第一番なり然るに神仙界には苦行とては無き故に肉體にて幽顯出入をば神々に願ふべきなり偖我が折々杉山僧正に伴はれて所々を見たるは川丹先生の杉山僧正に命じて我を連れ行かしたるにて我眼には杉山僧正は左程に貴人とも思はれず尤も物事を何によらずよく合點し知りたる山人にては杉山僧正に限るなり

一紀州の事を種々書きたる雜誌に云ふ紀州の御家中にて殺生に出て美麗なる雉を打ち申候處に鐵砲あたり不申其後毎度打ち候得ども中り不申に付後には其雉子に見知りを付け不思議の事と沙汰有之鐵砲の上手の人承傳へ行きて毎度其雉子を打ちけれどもいよ〳〵あたり不申右之風聞有之故に不思議なる事に付網にて取り候様に被仰付其雉子網にて捕へ吟味致し候處羽下に文字ある札つき候由これによりて其文字を寫し的角の裏に張り付けて弓鐵砲にてためし被仰付候處兎角に中り不申不思議なる事と申候由矢除の守にて可有之哉と被存候然るに雉の翼下に付け有之候札の文字左の如し「摔抬摔指」右は天明二壬寅年四月聞之とあり此文字は世上の人の門戸に常に張る人多くして皆知りたる事にて或は守として懷中すれば怪我過ちなしとて不轉の守とも云ひて此字を書して授くる人もあるに何と云ふ文義を世中に知る人なし然るに我思ふに此文字は天狗界にて見たる事あり或時杉山僧正に問へば摔抬摔指の四字は其よみは「サンバ、サンバ」「ジヤクカウ、シヤクカウ」「キンカツ、キンシン」と四音によみ一には摔抬摔指。摔拾摔拾。桑揖桑揖。とも書きて劒難鐵砲難弓矢難悪病難を除る近勝初。近進（一名先進と云ふ）といへる印の別名なりと云へり之に付きて思ひ出したる事あり先年印形と印名と印歌とを彼界にて寫し來れるが其印名は彼界の字を以て書きたるを後に尋ねて漢字を以て其字義を解したり其印名の字は右の文字も入りたり今其印名を記する事左の如し（印名等略す編者）右は天狗界に祕する所の五十印の名なり此五十印を以て印元と名づく此外に種々の印あれども人間用ゐて靈驗なし印法も術は五十印に限るべし此外に

九仙八海印飛行印長高童子印大鷹印小鷹印水印火印霞印など云ふはあれど五十印の中より出たるものにて諸の印は此五十印を以て主印となすなり偖又右の五十印には一名に付きて四名ありといへり我は一通り寫したるなり

一深山にて引きさかれたる人其體は離れ〳〵となりて其まゝに手足もよせ集むれば五體の調ふは天狗の仕業にて衣服など多くは高木の枝にかけたり又引きさかれし者の腸なく諸所の肉なきは杣人の惡魔界に入りたる者の食ひて血を吸ひたるなり又骨ばかりなるは狼の仕業なり天狗は鐵砲弓矢などは當らぬものなれど杣人及び惡人等の肉體にて魔界に入りたるは地に伏して「朝の明星夕の明星力」と唱へて打つ時は砲矢も當るなり立ちながらにして打てば當るなしと聞けり

一神經病とて諸事の心に掛り其妄念より異形の者の眼前に浮び眼をとぢても見え諸の異聲を聞き終には狂亂病を發して種々の雜言を吐きなどする類は邪氣の血に入りて妄想を引起したるものにて邪氣を去り妄想を退くる事は其法あれども容易に行ひ難し然れども發病の始めなれば平愈せしむる奇術あるなり

一幣串を持ちて何の言にても數度唱へ神の名佛の名何によらず雜々唱ふる時は空中に往來せる種々の邪靈の寄りて幣串に憑り奇なる事を現はすものなれど長くは續く事なく遂には害を受くる事なり俗人の神憑と云ふは此類にて何人にても行はんとすれば行はるゝなり其中には邪靈と妄想と感じ合ひて幣串を振はすことあり眞の神のよることは萬に一つが覺束なし然るに心正直にして道の爲に一心不亂になりて神憑の式を行へば憑り給ふ事あれど私欲の爲に行ふに至りては眞の神は來らずして邪靈かゝりて始めの程は物事もよくあたれども終には尻口なる事ありて大損をし或は困窮を招き身を立つるの時至る事なし樂などには神憑を願ひ且つ幣串を持ちたる時は種々に雜言など繰りかへす事なかれ又神憑に心得居るべき事ありて惡魔狐狸や死靈等の憑りて神名を詐り名のりて其教へには上下左右に手を振り又言語にて教ふるもあり手を頭上にて振るは神の使役し給ふ靈なり目下にて振るは惡魔なり其中に拍手する事度々にして又手をくみて口ばしるは多くは空中に浮かれまよへる諸靈なり又惡魔のかゝる時は如何なる尊き社殿にてもかゝるなり惡魔は一度憑れば度々來りかゝるなり憑る時目の前闇くなるは魔の類なり又火の如く光りて來るは神靈にて其時は一度び頭の下に自然と下るものなり又嗜慾なる事を伺ひ願ふ時は神は何時の間か去り給ひて惡魔入替りて憑り居るなり又魔の憑りたる時は其人の足の裏に「付くも不肖付かるゝも不肖一時の夢ぞかし生は難の池水

つもりて淵となる鬼神に横道なし人間にうたがひなし教化に付かざるに依りて時を切てすゆるなり下のふたつへも推してする」と唱へ灸を三つすゆる時は悪魔も忽ち離るゝなり又足の形を板にうつしてすゆるもよし又天狗界の物の憑りたるは大指の爪を握りかくして大豆類を好むなり

一天狗界にて妖魔を禳ふ桃劍 は如此にして身長二尺七寸中心の長さ一尺七寸にして山神氣々 山鬼 天清 水神氣々 水鬼 地清 鬸と書きて彫付け裏に、◇◇◇ 水神火 水神火とゑり付けたり此外にも二通りあれど彼界に祕したる故に記さず

一杉山僧正の占を行ふ詞にカケマクモカシコキ。クシマチノ思ヒ玉ノ彦御子ノ神チ始メテカラヤマトノ占ノ道チウケ傳へ給フ御靈ノ神世ノ人草ノ見知リ覺リカタキノリチ以テ今何々チ占ヒ思フ天地ノ息打墨繩ノ速ケク十寸鏡ノ磨キ明メタル事ノ如ク千重ノ一重モ違フコトアラシメズマサヤカニ告ゲ知ラシメ思ハシメ玉へと唱へ○○と唱へて手を八つ拍ち瞑目して暫くしてウ、といひて目を開きて後に合點の行きたる有様をするなり

一先年杉山僧正大山僧正と二人に魔術とて奇異なる術ありと聞けり何々の法なりやと問ひたりしに第一にチ、メノ蹴亂タツマノ蹴亂とて文言を唱へて足にて蹴るまねをして人を倒す法なり其詞を略して云へば天シキ〳〵地シキ〳〵天ニ八違ヒ地ニ十文字天切ル地切ル八方切ル前へオロシ後。アテ中略マルアテ。ビラリ。ハツトウシウン〳〵カンノマダシアミウン切テ放チテ倒スサンビラリと唱ふあり又十三式法と云ふありて鳩の體蛇の體狐狸の體劍の體弓の體釘の體大魔體火の體水の體木の體土の體人形體など云ひて奇術ある中に水體といへるは土人形を作りて詞を唱へ水に入れて漸々に洗ひ落す法にて火體も土人形を火の中に入れ詞を唱へ燒く法なり之は大に恐るべき詛術なり又土の體と云ふには三名ありて辻式、水口式、總含式とも云ひて人を速死せしむるの魔法にて之も恐るべきなり此外に遠當法とて卽坐にして人を絶氣せしむる法ありこは唱へのみなり此唱へを略して云へば「○○○○○。○○○○○。○○○○○。○○○○○○○。○○○○○。○○○○○。○○○○○。○○○○。○○○○○○。○○○。○○○○。○○○○。○○○。○○○○○。○○○○○○。」と唱へて手を十一つ拍つなりといへり詞も略して云ひて全き詞を知らば却て害ありとて教へざりき右十三式法は委細に其仕様も聞きたれど筆記せざりし故に忘れたり略ながらも蹴亂の詞と遠當の詞は其間ひたる時に筆記せし故に今かくし

るせるなり又摩利支天法。大神白骨法、聖天法、運下法、月輪法、三虫法、化落法などいへる類は今にも闇知したり

一夜中に異形のものに出會する時に長の高き短きを論ぜず前に見えて黒色又金色なる形の見はるゝは其正體は前にあらずして必ず後にあり女人の褌など腰に卷き行かば魔の目にかゝることなしされどかゝる事は男子のすまじき事にて常に雞冠石の粉と雄黄とを懷中すべし魔物に犯さるゝ事曾てなし又魔の正體を見るには股を開きて頭をたれ股より後を見れば正體見ゆるなり又後に草履の音してバタ〳〵と鳴りて夜〻人の往來なき所にてかく音のするは自分の臆病にて草履の砂の腰及び脛に當ると阿須波神の後を守り給ひて附き來り給ふと魔ものとの三つにて臆病にて何者か歩み來るやうに思ゆれども股より右の如く逆になりて見れば薄白く人形に見えて足なきは魔物なり足の見ゆるは足羽神なり何も見えぬは只我臆病にて件の草履の音のみなり又夜神社へ參拜する道すがら後よりホイホイと三聲呼ぶ時は其夜には參拜せざるがよし又夜中途中にて大男並に大牛に出會する時は目を閉ぢて三足退き後に廻り目を張りて口を大きく開き齒音を高く叩き兩手を下げて大指を握り見返りて又齒音を高くきびしく叩きつゝ齒をむき出し通る時は物なきが如く歩行せらるゝなり此大男大牛は勿論眞物にてはなく化物のことをさしていふなり

一大白星は萬星よりは近く見え此星に近づくに隨ひて虹蜺の如き色に見ゆるが中に小星二つ見え又近より見れば小き二星は前にあり此二星の閒を過ぐれば月を見る如く又近より見れば大空より地球を見るが如くなりて寒氣身を刺して此處より至る事難し此處より地球を見れば又大白星の如くきら〳〵と光りあるなり

一天狗主領の山人に某僧正とて山々分け持ちたる山人の中に某僧正の現世にありし時の名をいふ事はさして云はれぬ事なるが弓削の內ン人、巨勢朝俊、藤原朝臣高持、筑波小次郎源隆國、久米判官友行、高田入道義明などいへる人の僧正號を唱へたり又孝元天皇三年に入りたる根室建彦、光仁天皇の寶龜八年二月に入りたる杉山石磨、小野石根等は皆肉體の樣に見えたり

一投羽團扇と唱へて魔物に投げ付くる物あり羽團扇の本に鬼を付けてかり股の矢根を指して上に緒をつけたるものなり之は人閒の手にても出來るなり

一地球上の中なる夜國に近き所に一つの天狗界あり此界の名をフルシバルと云ふ漢字に譯すれば自明界と云ふ事に當るとぞいかなる故あるにや又此所には鶴鳥の尤

も多き所なり此界にて祝歌を歌ふ音聲を聞くに西洋支那日本の語を交へて言ふ樣に聞えたり

一先年土佐郡種崎町といふ所へ年頃二十歳許りの男老母一人を連れ來りて商家に滯泊して價をとらずに藥を病者に與へて忽ち功驗を發し或は又禁厭を行ひて病者を癒しけるに其事市中に名高くなりて堅磐が耳にも入りてければ日々我家に出入する男子萬屋楠馬といふを使として水位壽眞現名宮地堅磐高山白石平馬目今の幽名玄達殿に久し振に對面致し度又父常磐よりも尋ねたき仔細もあれば御苦勞ながら今宵は弊家へ來り給ふべしと申遣しければ其聲を聞きて大に驚き我名を知られては一大事なりとて俄に老母を伴ひて何處へ行きしか行方しれずなりたりと使の者の歸りて述べたり彼界を竊に出で來りたるを堅磐が杉山僧正に告げん事を恐れて逃げたるか將た何故なるか知らず其後大山常照僧正に問へば白石玄達は奇符の官を越え奇乙の上位になりて伯耆僧正の伴ひて九州の長崎に至れり然るに杉山石磨僧正の留守にて玄達奴の土佐國へ參りたりし時水位壽眞の使來りて大に迷惑せし事ありと長崎へ行く際に語りたりとぞ

一諸所にある神仙界の大都と思ふ所々は其形を多く寫したれども祕事祕言などは筆記をばゆるさぬ故に委しき記なし天狗界は下等の界なる故に筆記し來りて祕事もをり〳〵洩したり

一天狗に入りたる新參者の飛行の稽古をするを見たる事あり其狀は深山の高き岩上にて僧一人立ちて徑一尺五寸許りの磁石針の付きたるものに二所穴ありて西洋時計に似たるを仰向に置きて其穴にねぢを入れて四十度ほど卷きければ右の器の横より一尺五寸許りの針出てビリ〳〵と振ひ動きブン〳〵と音するなり其時僧正羽團扇を持ちて右手にて頭上にあぐれば一人の兄弟子と思ふが前に立ち護身法の印を結び次に大鷹小鷹の印を結び次に飛行の印とて左右の手の大指を組み違へて八指を廣げ頭上に擧ぐれば新參の者二人許りそれに從ひその通りして高弟の兩手を頭上より下し前に突出すと一時に岩を飛びて前なる山の麓を見がけて飛び下るなり其時僧正何か口中に唱へつゝ羽團扇を岩上より打振るなり又上を向ひ上るは十年閒ほど修行して後なり又僧正に從ひ行く時は自然と其威に引かされて行くと聞けり又彼の飛行稽古の始めには怪我する事もまゝありと聞けり

一天狗界にては魔物除の爲なりとて種々の稽古ありて投羽團扇、投桃核、手裏劍、豆打、劍法、石打、圓月刀、弓矢、風砲、投矢、棒業、笛術、水火術、六甲進退

禹歩、鎌術、十文繩、引落、日打、桃劍、吹針など云ふは見たる事あれど鋸はかつて見たることなし此外にも蹴術、集鳥使、降火術などいへる稽古もあれど僧正ならでは行ひて其しるしなし

一四國の南溟に方りて妹背二別島といふあり此島は余程大なる島にて四面浪荒く船の容易に至り難き所なり船にて行く時は雲の如くに此島を見る迄は行かるゝなり去る明治元年一月九日なりき杉山僧正の我とは親しくする故に妹背二別之島にて今夜山人等の會議あり足下一人伴ひ行きて其有狀を見せ申さんとて九日の日暮に伴はれて行きし事あり此時種々の山人を見たり出席の山人には日光山の大冠貴僧正、杉山石磨清定君、大山常照清定君、高千穗岳の火雷僧正、彦山の退勝坊、劍山金角僧正、朝鮮國の李意仙門、同國の易光仙門、來良仙門、琉球の天風嵐子、地虬嵐子、蝦夷國のヤマトチホヂミコ、エボツ彦ミコ、など云ふを始めて此外僧正の位置なる山人二百餘人集會したる中に天風嵐子、ヤマトチホヂミコの二人は當夜の會議長と見えたり此二人のことを杉山僧正に問へば天風嵐子は「アマミキユ、シネリキユ」といふ神の眷屬にて綏靖天皇十二年に入りし人なりヤマトチホヂミコは孝靈天皇二年に入りし人と聞けり又此會議へは來り給はざる貴人三名あり之は來り給ふことなし其三名は筑紫國の產にて〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇なり此三人は神武天皇卽位二年に入山し奇術を得て身に翼を生じ天の日鷲命の命令を受けて天狗界を始めて開きし元祖なり三人を合して〇〇〇〇〇〇〇の神とも稱するなりと云はれたり又御三神の御名は現世の人に聞かすことを容易に許されずと云へり此會議の條は面白き事あれども祕事もあれば洩しつ偖其夜の鷄鳴過ぎに至りて會議了りて歸る此一條には人間知り難きことの百分の一を洩したり

一天狗の行と云ふは實に苦しき行にして其緣に引かされて行く者すら死するより苦しく思ふものにて熱湯行、斷食行、寒水行、火鐵丸行、立止行、捕木行、火上行、夜興行、當番行、雪中行、日光行などいふありて其行をする樣を見れば身の毛もよだつなり其中には大罪の刑に行はるゝが如き行も其實はあるものにて天狗界の奇術を好み慕ふ人はあれど此界に入らぬが肝要にて人道が極樂の道なり緣に引かれて入りたる人も僧正以下のものは此界に入りて後は夢現の如く思ひて人間界をば折々心に思ひ出て慕ふことも常なりと天狗界のものに聞きたり〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、一名〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇等すら日鷲命に

令を受けてかく天狗界は開きたれどかゝる下界とはなすまじく思ひしに苦界に陷りたりと歎き悲しみ給ふこと時々ありと聞く故に此界の僧正といへども祭ることは宜しからず祭る時は漸々に近づきて悪しく此事は皆心得置くべし又天狗界よりも其縁にあらざる人は其實好まざるなり人閒たるものは長命にして此世に在るが第一の徳なり此事はかへすゞ〳〵も書き置くなり又あまりに奇異を好む時は折にふれては魔神のよるものなり

一飛行して遠く行く時は諸の界の近き邊を通る事もあり又星の近くをたま〳〵に通る時は白き霞の中を通る様にて此時は星の見えざる事もあるなり又何れの界に至りても近く寄る時は其界を下に見るなり行く始めは上を向ひ行けどもいつの閒にか身體のふりかへるが合點行かざるなり

一少童君に伴はれたるより故ありて川丹先生を師と仰ぎ奉る川丹先生の命じて杉山大僧正等に伴はれ心易くなりて折々は諸所へ行けども杉山僧正等の界に入らぬは生涯の仕合なり然りとて天狗界を世の人悪く云ひて謗りなどするは極めて宜しからず其仔細は夜中一人往來の節深更に及び山中にて天狗を悪しくいひ譏りて試るべし其驗多くは速かに來るなりたとへ其時來らずとも一月を經ぬ閒には來るものなれば必ず何も云ひ且つせぬが宜し現世人は疑ひ多くして信ぜずかゝる事は世には無きものとおろそかに思ひたる人もあれど幽冥は畏るべきものにて譏り笑ふ人閒も死して後には合點行きて後悔するなり

一神仙界に度々出入し天狗界をも度々見物するまに〳〵面白くなりて今日は神仙界より御使の來るか明日は杉山僧正の伴ひに來るかとひたすらに戀しくなり人界のことは苦しくなり彼界の事は殊に面白くなりて片時も忘られず折にふれては不圖聲を出して川丹先生はなぜに來らぬなどゝ獨言する聲の妻や奴婢どもに聞えて不審に思はるゝこと度々ありけるに川丹先生の云はれけるは一月に一度許りは汝の閑暇の時を見ては伴ふべけれども現界の大義を忘れ勤を怠り家業を忘るゝに至りては神仙界の掟に違ふ故に人閒の勤を第一にして忠孝は云ふに及ばず人閒交際の正義を盡すべしかくせざる時は我も師弟の縁を切るなりと深切に諭し給ふ其時は其御詞の肝に銘じて身の毛もよだちたり

一書籍を澤山讀みて生合點して學者自慢し愚人を見下し無理なることも道理らしく云ひまげ常に珍言奇事を好み或は神もなきものゝ如く言ひなし己より地位高きものをそねみ神典などは悪しく譏り行く程に命終りては幽冥界のあることを知らさ

る故に狼狽し靈魂の行く處を失ひ迷ひ居る中に同類をふやさんとする魔神の界に引入れられて神府には至り得ず不自由を極め永く苦みを受くるもの多くありと川丹先生の云へり故に何れの界に入るも現世の心の居り一つなり

一杉山僧正の弟に杉山熙道僧正といへるあり彼界の内にては二杉熙道君といへり此僧正には白石左司馬、水上時馬、坂田義平、吉永金九郎などいへる人の付添ひなり白石左司馬は此界の名にて現名は信田豐前といひし人なり水上以下は現名にて幽名を水上時馬は白石靈碧、坂田義平は白石張鐵、吉永金九郎は白石野丈といひて如何なる事か皆白石と名乗りたり此二杉熙道僧正も白石熙道君とも云へり此熙道君不二山にありし時は大山日石と云ひしを後には日の字の上にノを加へ白石としそれを名字にせられしとぞ又杉山僧正の寅吉に日石と云ふ名も付けられたり日石と云ふは太陽中の物を云ふとぞ此界へ支那より來り入りたる人にも炎石左郎血石左郎と云へるあり

一杉山僧正の界には鷄卵、鰹節、干魚、鳥類を大に好むなり四國の天狗には右様のものは皆嫌ふが中に鰹節のみは食するなり

一我父常磐大人年三十六歳までは武術を好みて劍術砲術弓術には別けて其道に達し

何れの處にても先生と仰ぎ敬されしに父が砲術の師たりし田所氏或日父を招きて云ひけらく足下神主の家に生れながら神明に仕ふる勤めを捨て年來武術を好み其奥義を得んとして砲術は其極に至ると雖も我職務に暗きは實に生涯の恥辱なり我職務を怠りては神明に對し奉り第一の不敬なり足下武術に心を入れて粉骨するが如く神明に奉仕すべしと示諭せられけるにぞ之に感服して三十七歳の正月元日より武術を止め毎夜子刻より起きて寒暖霜雪の間も休息する事なく地上に立ち天を拜し次に神前に向ひ祈白する事巳の刻にして竟りさて朝膳を食す夕は日暮より五つ時(今の八時迄)に及ぶ我父の行ひの有狀を見るに雪の夜などは庭前の石上に坐して祭服にふりかゝる雪は氷となり之を握れば服と共に氷りたりされども撓まず手を組み空を向ひて慇懃に祈白すること二時ばかりにして家に入り神前に向ひて又禮拜すること十年を積み漸く大山祇命に拜謁するを得て益々魂を凝らし終に海神及び諸神に通ずる事をも得又天狗界の者をも使ふ事を得て行く程に畏くも大山祇命の御依頼によりて土佐國吾川郡安居村の高山手箱山と云ふを開山し大山祇命を鎭祭し奉り衆人を集へて大鎖三十六尋を此山にかけたり其時より父の神明に通ぜし噂の盛になりて奸夫十八人其事を種々に申立て詐上し遂に神主職も放され遠

方往來さへ留められければ父の代りに堅磐十二歳にて神主職に召出されたりされども屈せずして神拜の勤め前に倍し怠らざりければ父を詐上し且つ吟味せし者は皆年々に死往きて一人も殘るものなきに至りしかば遂に父の正義分明なるにより又召出し給ひ父子勤めを許されたり此時より手箱山へは父の我魂を神法を以て脫し使に遣し給ふ事度々にして終に大山祇命の御執持によりて少名彦那神に見え奉る事を得て終に伴ひ給ひけるぞ諸の幽界に出入する始めにぞありける之皆父大人の恩賴によるなり偖父の神法を種々神々より授かりて飛行の法をひそかに近き山に入りて修行し海上歩行の法をも行はんとして其用意をしけるに餘りに奇妙なることを授かりし嬉しさに神明に口留せられし奇術を思はず信仰の諸士に語り其御咎めによりて明治三年中風病を發して神明より授かりし祕事は多く忘れたるに折にふれては又人々に神明の授け給ひて祕しけることゞも不圖思ひ出て語りけるに同十二年言語を止められ手足叶はずしてそれより一言半句も出す事能はずして當年二十二年に至れりこれに付きては川丹先生に父の咎めを神等に赦し給はんことを依賴し少童君にも父の病氣平癒を祈り申せども明治三年に死すべきを生して言語を止めたるなり死して後に至れば又慈愛は本の如く致すべしと宣ひて平療の願は叶はず悲哉偖父の祕密を語りてそれを聞き安りに其法を行はんとして仙人ぶりて自慢しつゝ己が自然に神明に通じ御教を蒙りたりと誇りし者二十九人ありしが如何なる事にや二十八人は死して今其一人は殘りて家貧しくなり今も此世にありて賣藥などせり故に神明より授かりたる祕事は死すとも洩さぬが肝要なり偖父常磐大人の神明に奉仕せし間の勤めの艱難苦行せられし事は神官中普くなきが如く我ながらも覺ゆるなり之は我國人のよく知る處なり我は父の萬分の一も其勤めなくして神明に見えしはこれ全く父の恩賴によるなり父は畫を好みて其稽古をもせし故に神々の御形も多く寫し置きけるが中に大山祇命の眷屬を率ゐ給ひて見はれませる時御許しをうけて寫したりとて祕め置ける神像の圖は殊の外に嚴重なる御備立にて畏く見奉るなり又父の開山せし山は豫州石鐵山と牛角の如く屹立して最高山なり石鐵山は海神三筒男の神の鎭り給ふ山手箱山は大山祇神の鎭坐にて此宮は其後鄕社となれり因に云ふ此山にも山人の住みて夜に入れば山上の南方にて種々の嘶聲の聞ゆるなり此山の天狗は一年替りに交替して伊賀國[illegible]一我父幼名佐之助後に任官して上野助重房といふ後又革名して布留部といひ諱を常磐といふ其後又諱の常磐を實名となしたり明治三四年迄は布留部といひしが中症

を發し遠方の往來は出來がたく大に難儀せし折柄明治四年神社改正鎭祀役と云ふを命ぜらる病氣なれば辭退申せしかども籠に乘りてなりとも當國中の奧院或は入らずとて人の入り難き所は改正致す神官もなければ汝到るべし神佛取分は一大事なりとて遂に此役を蒙りければ辭しも敢ず籠にて國中靈場と呼ばれたる足摺山に至り奧院を改正し神佛の取分をなせり此處は月曉と云ひし名僧の體を引さかれし處なりかくて道中籠に乘りて彼所に赴きたりし次第奇異なる事のあれば記して左に出す

覺

天滿宮社神主
宮地布留部

右者足摺山境內鎭坐ノ諸社ノ中熊野。白皇。淸淨。三社之義者素ヨリ古代ノ靈場ニテ金胎兩部ノ祀典ニ御座候處已ニ朝廷御沙汰ニ依リ別當持被止神職御指備ニ相成居候ヘ共未ダ內陣奉齋ノ神佛御取分之儀其儘ニ相成居候閉此度殿內淸祓之上新ニ內陣神璽ヲ備ヘ佛體ヲ被除神璽安置鎭祭被仰付右御用方トシテ彼地ヘ御指立被仰付之

未九月　指出

同二十三日

一、送夫二人（駕籠昇）潮江村天滿宮神主宮地布留部殿右者幡多郡足摺山神佛御取分鎭祭御用被仰付候閉往來道筋上宿並宿共相渡候樣可被仰付候以上

未十月　社寺係

勸業司中

覺

一、御用度御長持二人捧貳荷

一、駕籠一挺

右鎭祭御用ニ付足摺山ヘ被差立候ニ付テハ御渡ニ相成候以上

未十月　社寺係

天滿宮神主　宮地布留部殿

足摺山（亦云蛇山）鎭祭次第御屆

一、十月廿五日高知出立十一月三日幡多郡中村着同日ヨリ神器取調ニ掛リ同八日

相調ヒ同九日中村出足下茅泊り翌十日伊佐着

鎭祭に相係る神官左の通り

祭　主　宮地布留部

後取當社神主　北代信濃

同　禰宜　宮内清馬

自力寸志を以て鎭祭に相掛る神官

白山神社神主　北代八百路

高岡神社神主　岩崎肇

伊都多神社神主　浦田競

同　社　禰宜　永橋清來

田野川天神社神主　浦田傳

下の茅天滿宮社神主　永橋岩根

大岐御影神社神主　橋本速登

同十一日神器神供等取調相濟み白山神社拜殿に於て一同祓除の式を修し夫れより熊野神社及び清淨殿に至り祕物の箱を開き之を改むるに皆佛體也但し熊野神社に十二箱清淨殿に三箱あり兩所共に皆物體なり尤も其餘に金幣あり（此祕物の箱紙釘にして古來未だ開きたる例なしと云ふ）同十二日午時頃一同濱邊に出で潮に入り身滌祓除の式を修し佐田山上白皇（しらすめ）神社（俗に奥院不開堂と云ふ）へ登り（凡そ三十丁許り）社司北代信濃が家に休息す暫くして時已に午後五時に至る衆皆進んで白皇神社へ參拜す夫れより又登ること凡そ六丁許りにして岩祐と云ふ巖に（此處神社なし則ち此岩を以て神體として祭る其岩形末廣にて扇の如し所々に玉を含む前に石坐に似たる石あり）至る於此則ち石坐に着き神供を獻ず（行事中前に供へ在る所の幣帛風なくして振動く）時に西方の虛空より鳴動し來り頭上の大木を振動せしむること恰も大風の如し空に聲有て布留部と呼び續けて猶語あれども衆皆辨知すること能はず直ちに恐怖平伏す漸く獻供の儀竟りて衆其岩の後に廻る此處廣さ三四尺長さ五六尺清潔にして掃除したるが如し扨此より降ること凡そ一丁餘り亦北に向ひ上る事一丁ばかりにして峯山神（此所にも神社なし巖上に瑕あり徑六七寸高さ七八寸石を以て蓋とす俗に惡靈を封じたる瑕也と云ふ岩祐及び此峯山神陽所共に不入と稱ふ所にして人跡絶えたるの地なり然るに毎年正月二十四日白皇神社の神官愛に神供を奉る御飯は神聞食歌無くなると云へり）と云ふに至る巖上に瑕あり石を以て蓋とす衆進んで之を開かんとするに醒氣甚しく近づくこと能はず故に皆鼻を蔽ふて退き降ること一丁許り時に岩崎肇後れて來らず衆怪しんで之を顧るに其着たる烏帽子の掛緒木枝に結留められたり則ち其枝及び掛緒等其儘切取り歸りて奇事の證とす此時日已に暮れ

人面を見分かず而して又降ること一丁許りにして漸く小道に出たり又歩すること二十間許り東方より斗の大さなる火輪飛び來り十間許り前にて忽ち散亂し遂に往く所を知らず扨又社司北代氏の家に歸り休息す其夜九時頃衆再び白皇神社に進み拜式相竟りて內陣を開き奉る其美麗なること言語の及ぶ處にあらず內に十二の像を安置す皆佛體にして一も神璽なし又其側に一の厨子あり錠を以て之を固鎖す鍵なくして之を開くこと能はず故に愼みて之を破り見奉れば內に神體三體あり云々衆皆感激嗟嘆の聲を發し平伏尊拜す殊に謹愼を加へて之を中央に安置し奉る然れども此神何神と云ふを知らず衆或は默然たり時に社司北代氏の兒未だ十才に不足と云ふ偶然獨り自ら來り進んで神前に至り幣を取りて卽ち神憑し其祭神三柱の神名且つ新に猿田彦神の神璽を設けて合せ祭れと敎示し給ひ畢て其幣を祭主宮地布留部に渡し給はりぬ上の三柱の神名別紙に出すを以て爰に略す布留部之を授かり奉りて則ち御敎示の如く仕へ奉りて神式に掛る此時又西方より虛空鳴動し來り社頭に止まる神社內外震動する事一時許り其勢ひ恰も大風の大木を倒すが如く且つ其着坐の前後左右猶在數人衆大に恐伏する時に宮地布留部太玉串を取り進んで鎭祭の儀を行ふ衆共唯稱す神光流星の如く聲に應じて來降す爾後一山更に寂寥たり於是衆殊に信仰祭式を修する事常の如し百事首尾能く相濟み衆兩段再拜して退出す北代氏の家に歸り則ち直會の儀あり此時社頭に於て神樂の音聞ゆ因て宮地布留部一人又社頭に至り祝詞を奏す聲を聞き衆亦來り共に拜して歸る頃已に黎明也扨翌十三日十二時下山して伊佐の宿所に歸る同日前件相改めたる所の熊野神社及び清淨殿の佛具佛體等取片附の上熊野神社を始め奉りて小社十一社淸淨殿に當分相殿合祭を以て其夜十時頃より鎭祭奉仕徹夜無滯首尾能く相すみ翌十四日十二時頃伊佐出足を以て同廿日歸着仕候事

右佐田山鎭祭之次第大略相記爲御屆如此に御座候以上

明治四年辛未　十一月

潮江村鎭坐

天滿宮神主　宮地布留部

庶務課內

社寺係御中

一紫微宮玉京山鳳宮の形狀を拜せんとするには先づ空中寒烈の所を登りて又降らんとすれば黃黑色にて地を見るが如く其中央と覺ゆる處より三色の電光を放つ之れ卽ち玉京山なり其光りを目標として降る事二時閒許りと思ふなりさて海岸に降り

着きて南方と覺しき海中に紫蘭島屹立す其中に宮殿樓閣空碧に聳え屬島二あり之を眺望しながら北に向ひて大沙漠を過ぎ大樹の林を三里ばかり歩みまた一の沙漠に出て東南に向へば初めて純黑なる門を見る靈章門といふ此門に入れば西南の海岸より東北の沙漠に達する通路ありて道の幅七十間許り門より七十間歩みて東南に渡る長さ八十間許りの橋あり此橋を經過して方七十五間許りなる臺に達す玉琅臺といふ夫れより東方に向ひ四十間許りなる橋を渡れば純黑門あり全化門と云ふ此門に入りて掛橋あり長さ二丁半許り斜めに空を向ひて高臺に架せり臺上に高さ四間巾一間許りなる碑あり數千字を彫刻せり然れども其字讀み難し此界の掟を記せしものといふそれより東に斜めに屈曲せる橋を下る事凡そ二丁餘にして太眞場に達す道巾凡そ二丁これより東北に向ひて行く事三丁位にして四角に築立せる上に口の明きたる石臺數ケ所に散在す西北方を見れば曠々渺茫たる大沙漠あり東西の空を遐觀すれば針の如く峨々たる峯嶺凸凹屹立す其數々十東方に綿々として漸漸に高く玉京山に連なる東方に歩すること二十丁許りにして北に向へば二重に築上げし東西の高石垣あり長さ遠くして人目の及ぶ處にあらず地下は三階の家となり西方より水瀧のごとく三所落つ南方を望めば溟海色紺青の如く海上目に遮るものなく天と相接す北に向ひ石壇を登る事一丁にして東西に通ずる道あり巾半丁許りにして高さ一丁餘築上げたる石垣あり石壇を登れば昇降門に達す此門より東に最長き家あり西半丁許りにして長き家あり次に又門あり紫蘭大樞宮號眞光遊門と云ふ此兩門の間左右に長き樓あり西に嚴重なる大殿あり徴眞宮と云ふ右二門の間を鸞磐場といふ次に又高樓門あり左右に又高大なる閣あり西北方に莊嚴なる磐を切立てゝ九重の二館あり簿式館といふ紫蘭大樞眞光遊門の次に又玉櫃門あり次に玉鏡門といふあり玉鏡門の東南に當りて九重玉樓あり分靈館といふ東南に廊下傳ひにして玉館あり日使館といふ其西に當りて殿閣あり眞粉臺といふ日使館の北に閣あり東に二ケ所宮殿あり其北に當りて四ケ所の宮殿あり分靈館の東北に池あり玉鏡門の北に大磐石を切立て四角の穴ありて其上大館あり御神館と云ふ其西に宮殿あり其西に一山を隔て大瀑布あり此水は宮殿の地下を貫通し下の海岸の三瀧に出づ御神館の下なる穴より鳳闕門に通ず御神門より司命館に至るまで山路直立なり司命館より八丁登りて紫微上宮に達す御神館より直立九里紫微上宮の地方八丁嶺の西端に巨巖達々として突出して落ちんとする形狀なり爰を產光嶺といふ上宮嶺より下觀すれば西南に綿々せる山脈中三峯尤も高し上より第一峯を火切峯とい

ひ第二峯を鏡山といひて鏡を磨くが如く上宮の三光此峯に映じて輝光四維に照徹す第三峯を伏指峯といふ其地に大沙漠あり此沙漠の北に鬱繁せる大樹高さ一里雲を凌ぎて見ゆ上宮より東方を下視すれば平地渺茫として人家に髣髴たるを見るなり

一神集岳の形狀を拜せんとするには先づ大空に登り西北の方に降る凡そ二時閒許りにして着す神集岳乾の方の海岸に樓門あり見麗門と云ふ又五化門と云ふ此門を入りて道巾八閒左右小松原なり道程九里にして門あり舊名寶龍門といふ今六元門といふ門內に至れば警官數多出張して判鑑符を檢査す警官の許可を得て此門を經過し又左右小松原なる道を行く事三里の內貪慾心ある者を試みんが爲に古器珍物等捨置きたり若し之を撫ひて行く時は先に小き門あり之を思昔門と云ふ其門の內に茅葺の館あり神火殿といふ其殿の左右に幾二流建ちたり此館にも數多の警官ありて若し拾ひし品物あれば如何なる物を其方竊取したるやと先に拾ひし品と同じき物を出して鞫問せらる遂に白狀すればそれより六人の護送官相添ふて北に向ひて松原の東に道あり此道を歩行する事九里にして其內三里ばかりと覺ゆる所より東に巨巖を堆く積みて高山の如くなるを眺望して行けば遂に退妖館に至る一に呼吸館と云ふ其館に入りて六人の眞人館人に罪科を奏告す其れより嚴しく叱咤を受け罪の輕重によりて處分せらる輕きは警吏相伴ひて神集岳入口の門より東方にある通路に出て現界に歸らしむ退妖館の後面に館左右に在り官人の出張猶豫所なり正直にし慾心なく捨置きし珍器を拾はざるものは神火殿前を經て行く此より二路あり東方に通じたる道を行く事四十里にして大國主神の坐す宮殿に至り西方に通じたる道を歩行する事十里にして玉壁山に至る山腹に通路あり二十里の閒を歩む僅に足を容るゝの細道なり危畏云はん方なし漸く此山腹を過ぐれば改鑑臺に至る宮殿ありて眞人數多あり行人の鑑札を檢査す此所の許可を得て青城山に登る頂上にて西方を遙望すれば始めて天元山勇山見越山を見る其處に池あり知穢の池といふ上に碧白に似たる岩ありて清水湧出す柄杓を以て池の水を汲み岩上に湧出する水に注げば火炎上る者は往き上らざる者は跡へ歸るなり之より又道二道あり右へ下る坂道は嚴しき故に左道に降る事三十丁にして東に廻れば徑り二尋なる神字を彫せる石を八重に積み橫に十七數を並列せり此所を斜めに下り五龍山東麓を越えて歩行すれば廣さ四十二閒許りなる川水あり橋を架す隔化橋といふ北方を眺望すれば磧ありて遙かに宮殿二字を見る諸藝の勝負を決する處なりと聞く青城山の頂よ

り隔化橋迄道程凡て二十八里此橋より南に向へば宮殿あり退妖上官宮と云ふ此處を過ぐる事九里許りにして南東西巽方に通ずる四道あり南道は大永宮東門に出るの道巽道は神商館四殿に通じ且つ柳原神宴臺に達す東道は大國主神の九羅殿に達す此處を西に向ひ歩む事暫時にして南に宮殿一宇を見る西方に宮殿八宇を見る之より東に向ひて大永宮の朝神門に至る方四十里の高壁圍繞す四方に大門あり高壁の外面に大道を隔て西南の二方に溝塹あり垣内大永宮を四方より圍みたる數十の壯嚴なる宮殿あり南門を采女門といふ南門外より東の大道を眺むれば高壁の中に宮殿のある事を見る之を神幣館といふ神界の兵器を藏むるの所南門の正面の二川に橋を架せり此橋を渡りて東西を見れば女神館東方に一宮西に四宮を見る此處を過ぎて通道二分す南道は簿式館を經て山門の穴に通ず此界へ入るの裏門なり東方を見れば遊神玉殿あり此館は海岸絶景に臨む海面に四山あり風光の明媚又現界の名所の及ぶところにあらず見越山の西南に當りて環玉山あり全山青色なる水晶なり南方に當りて試靈山を見る此山に穴あり頂上は空碧にかゝる家に貫通す又東北より入るの通路あり右神集岳神界の大略なり

一深山にて雷鳥佛法僧の飛び通ふ邊には天狗の住所其近きにありと心得べし又寒溫草の生ひたる所には必ず大蛇住むと心得べし岩屋の中に青炎の有る所に限り魔物住むと心得べし

一〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇といへるは禍神の數多ある中の三神の名なり〇〇〇〇〇〇神は見る神通といふを掌る〇〇〇〇〇〇〇〇神は聞く神通といふを掌る〇〇〇〇〇〇命は言はせる神通といふを掌る之は梓式を行ふ覡巫の祭る神にて深き譯あるなり

一少童君に伴はれて先年天竺の靈鷲山に至る錫蘭島といふ所の中に「アダムス」といふ山あり靈鷲山の事なり頂上より水落ちて二流となり又合して一の川となる此川を「シテガンケン」といふ山の七合位にして大池あり頂上は牛角の如く兩立す此山の高さは十四里ばかりと覺えたり支那佛界には青龍島と呼べり此山は余別に委しく記せる書あり

一土佐國吾川郡仁淀川の川上にて十七八歳ばかりなる美少年の黑き羽織を着て黑色の袴をはきたるが川岸の淵の邊に立ち居たるに其面貌を見るに美麗貴品なること言語の及ぶ所にあらず暫く右の少年を見居たるに空を向ひ炎を吐きて逆になりて淵に投じたり我忽ち淵に走せ寄りて見るに大なる蛇となりて水底に漸々沈みたり

不思議なることゝ思ひつゝ其所をたちて十四五間許り離れたる時に何處ともなく二十歳ばかりの女の淵の邊に來りてさめ〴〵と泣きたり我其女の側に立ち戻りて無理無體に連れ歸りけるに伊野村の某の娘なり日を經て竊に聞けば脊青く腹赤き小蛇を七つ產みたりと云へり

一大嚴松理君、青文雲仙君、峨月利仙君、中使黃道君など云へる天狗僧正より昇進して神仙界と山人界との中間に位して一の界を立て居るなり此界の名を兩傳仙境と云ふ

一現名藤原平次、幽名淸淨氣玉利仙大君は常に九州の山中に居して從者も多くある中に淨伊白龍道異人、現名劉熙溪。淸玉異人、現名劉應明。淸達膽方異人、現名諸葛潛良。淸觀法當異人、現名許湯淸。淸長立異人、現名孫先永。五淨善異人、現名延丈淮。淨通玉會異人、現名楊窪明。淸泉谷異人、劉能道。利法異人、現名張全了。淸通異人、現名文玄角。淸道井華異人、現名應傳仲。淸山方治異人、現名吳伯景。淸方日龍異人、現名墨孔易などは支那國の產なり淸角陽異人、現名弘井權大夫藤原親春。三淸五位異人、現名佐伯次郎高綱。奇見異人、現名高井三郎行國。利淸行異人、現名堺六郎左衞門宗幸。淨玉道異人、現名吉永熊三郎。淸玉心異人、現名島田幸安重信。澤林淨玉異人、現名山崎八九郎基信などは日本の產なり此異境中の卷物の文字は（文字略す、編者）

以上

400
435

昭和十五年二月四日印刷
昭和十五年二月十一日發行

【非賣品】

發行者　防府市宮市　友清歡眞
印刷者　八幡市浦町十四丁目　島津安太郎
印刷所　八幡市浦町十四丁目　濟世印刷合名會社

發行所　周防國田布施局區内石城山　神道天行居
電話田布施九番
振替大阪六六六三七番

不許複製

終